



# 求道

第壹卷  
第六號

## 求道第一卷第六號

目次

◎夏季の修養及び信仰と戒律	〔社説〕	藤井專隨
◎他力奮勵主義	川端嘉話	近角常觀
◎感謝の念	同一風味	安藤鐵腸
◎求道の動機		百目木劍虹
◎人は人也		無絃生
◎有絃無絃		住田智見
◎永劫の同朋		鈴木卓苗
◎無題録		一記者
◎南村閑話	海外事情	
◎獨逸佛教徒に告ぐ	風尚餘韻	
◎俳句		句佛

- ◎漢詩
- ◎雜詠
- ◎短歌

▲新刊紹介  
政教時報

- ◎日曜講話◎第二求道會◎編輯餘録
- ◎佛教夏季講習會雜觀
- ◎軍艦だより

前田懸雲  
麻郷生  
菊池曉汀

一記者  
窪田重次

郷木求道學會

\* \* \* \* \*

七八兩月休講仕候

\* \* \* \* \*

段九 第二求道會

求道

第一卷  
第六號

求

夏季の修養及び信仰と戒律

一年容易に又仲夏の季節とはなりぬ、滌溪の周茂叔は必ず一歳一度書生をして父母に歸寧せしめしとかや、江湖に彷徨し、學窓に呻吟せし人々も、行李を整へて、故郷の山水を訪ひ、或は一家團樂暑を白砂青松の間に避くるの人もあるべし、蓋し夏季は一年中最も閑にして身體安らかなるの時也、此の如く閑なるときは外縁最も入り安く、身體安らかなるときは内心亦放ち易からんとす、況むや、炎熱熾くか如く、威儀亦保ち難き恐あり、洵に是れ求道の士、深く心を致すべきの時、肅々として自ら其身神に鞭たば、九夏釜中の生活却て清涼の天地を見出すこと難きにあらざるべし、寧ろ是れ心靈修養の好時機たらずむば非ず。

昔者大聖釋尊は印度の夏中雨季に於て、流水氾濫して衣鉢を漂失し、蠢々たる小虫、生々たる青草を踏殺するの頗る憐むべきを悲み、茲に安居の制を定め、佛陀の教團に屬する諸弟子を一處に止住せしめて、他に遊行するを許さず、佛陀は中心となりて弟子を訓練し、修養を専らにせしめ玉へり、吾人は當年を想像して、如何に其制の清らかにして、健かなりしかに感激するものなり、緬甸佛傳、結夏中に於ける作法を記し、佛陀は一日を分つて五分し玉へりと云ふ、曰く、

第一、佛は天明に臥床より起ちて、盥漱し衣を着けて禪室に入り、普く一切衆生の根機如何を觀察し、畢りて後袈裟を被り鉢を携へて、教化を受くるに堪へたるもの、住する方處に乞食し給へり、此行作は佛一人なることあり、又多數の弟子を從へ給ふことあり、

道

(一)

第二、行化より歸り給ふや、佛は足を洗ひ、比丘衆を集めて法義を説き、觀法を授け給へり、比丘衆は此に於て佛前を退き或は三兩相携へて法義を研究するあり、或は一人靜處を尋ねて獨居修觀するあり、佛は此に食事を了り、禪室に退き正午少く過ぎ再び起ちて觀察を行ひし後、四方より來詣せるものに對して説法し給へり、

第三、説法畢り大衆退くや、佛は沐浴し、且、園林に逍遙し給へり、去りて本處に歸り給ふや、比丘衆は觀法研討の結果を告げ疑惑するところを問ふて、佛の教を受け、以て日没に至る、

第四、比丘衆退くや、佛は諸天善神の爲めに説法して中夜に至る、

第五、夫より少時行歩して寢に就き給ふ(藤井宣正氏佛敎小史)  
如何に其趣の神聖にして且つ清淨なる、且つ、其方法の剴切を極め、規律の嚴肅なるや、吾人は遙かに大聖在世の當年を回憶して、欽慕措く能はざるものあり、現時濁惡滯季の世、佛制の如く行ふこと固より企て及ぶべきにあらざるも、若し佛陀大慈の聖訓を鑽仰して、現今行ひ得らるべき範圍に於て其芳躅を辿らば、蓋し夏季修養に於ける好模範ならずむばならず、吾人は茲に其精神の復活を希望して止まざる也。

古來佛敎各宗に於て安居の制度ありて、夏中僧徒相集りて講學研究することあり、然れども、實に是れ學究的態度にして宗教的修養としては全く意味を失せるもの、如し、又今より十三年前、大日本佛敎青年會、夏季講習會を擧めてより、全國到處、之に倣ふもの續々起り、山水明媚の地を卜して講話を開くもの多し、其會する者青年學生にして、前者の生命を失せるが如きにあらざるも、猶講習會の名稱が顯すが如く、二週の日子間に於て簡單に敎理の大體を究めむとするが如きものなきに非ず是、現今の如き求道の態度益々摯實ならむとする時機に當りては頗る適切ならざるの憾あり、是本年の講習會が幾分の改善を企てたる所以にして、理想としては、猶一層修養に力を致すべき余地あることを確信する者也。

吾人は、翻て、佛陀在世の安居制を回想するに如何に其修養的なるかに驚くもの也、吾人は團體としても、家庭としても、若くは一個人としても夏季修養の方法としては大に之に則るべきものあるを感ずるもの也、若し嚴格なる意義を以てせば修養の士、三夏九旬一定の聖場に自炊安居して互に道を修する確かに清淨策勵の方法たるべしと雖、此の如きは事をして益々不容易たらしむる所以、吾人凡庸に向て高くして近つさ難からしむるもの、寧ろ各人の境遇として之を行ひ得べき範圍に止め、活用し得べき形式に變更せば、却て、佛陀訓戒の眞意義に契當するものと謂つべきか。

吾人は試みに安居制の形式に倣ふて以て吾人日常の生活を律せむか、曰く、吾人天明に臥床より起ちて盥漱し、衣を着けて禪室に入り、佛前に跪きて、恭しく香華燈明を捧げて、嚴肅なる朝の禮拜を行ふべし、其誦する經文の如き誦讀以て意義を味ひ、親しく佛陀に接し奉るの思を爲すべし、必しも時間の長さを要せず、寧ろ態度の敬虔なるを尙ぶ、時として諷詠其の徳を嘆する亦可なりと雖、必しも儀式に拘泥せずして、清新の方法、寧ろ讚嘆の誠を表せむことを主とす、蓋し、一家中に於て神聖にして且つ靜觀に適せる佛間を有すること必要の事たり、法華經安樂行品に曰く、菩薩時ありて靜室に入り、正憶念を以て義に隨ひ法を觀し、禪定より起ちて、諸の國王、王子、臣民、婆羅門等の爲めに、開化演暢して、劫經典を説かば、其心安穩にして怯弱ある無しと、蓋し之を嚴守する事頗る難しと雖、之を以て理想として、一日の早朝先づ靜室に入りて其日に於ける修養若くは業務に就きて豫考するが如き最も可ならむか、且つ佛陀行乞の制の如きは現時在家の吾人に向ては行ふべからざる者、之に代ふるに朝の散歩を以てせば、清かなる天然に接して確かに精神を爽かならしむる利益蓋し大ならむ、是佛制第一に當れるもの也。

朝の散歩を終り、足を洗ひ、朝餉を終へ、第一着に最も主要なる修養の方法を實行すべし、若し團體を結びて修養の會合を開かば佛制の如く、法義を聴き、實行法を授かり、師の前を退き、或は三兩相携へて法義を研究し、或は一人靜處を尋ねて獨居修觀せば頗る適切なる方法ならむ、若し個人を以て之を行はむと欲せば、最も修養に適切なる靈的の聖教を心讀靜觀するを可とす、若し事業の爲すべきあるものは、先づ少時間熱心に修養の聖教を熟讀して、直ちに其業務に着手すべし、蓋し修養の方法としては靈的の文字を少くして深く味ふを要とす、吾人は有縁の聖教として嘆異鈔と御一代開書を拜讀す、午飯後猶修養若くは業務を終りて四方の來客に引接し、若くは求道の士と心を傾けて語るが如き、頗る會心な事ならずむはあらず、是れ

佛制の第二にあらずや

午後の説法終りて沐浴し、園林に逍遙して歸り、若し團體ならば、佛制の如く、各觀法研討の結果を告げ、疑惑する所を傾けて、師の教を受くるが如き最も適切なり、若し個人として修養若くば修業せば、其一日の結果を取纏めて、其功を散逸せざらしむるは恰當の活用法ならむ、かくして日没に至る、是佛制の第三なる者、第四は晚餐後に於ける家庭の團樂、團體としては信仰感語の會合に比すべきか第五は佛を禮し、日記を誌し、終日の行動を跡付て冥想默契、肅みて佛天に感謝して寢に就かば吾人の境遇として稍完全に近きものたらむか。

已上記するが如きは唯聊か志を記すのみ豈吾人固く之を行ひ得べしと言はむや、然れども、吾人は佛在世の安居制を想像して感止むべからざるものあり、聊か記して以て自ら警め、且つ夏季修養の方法として眞摯求道の士の参考に供する所なり、若し各地の講習會にして此法を實行するも可なり、又家庭として朝の禮拜、夜の感謝一族相率ゐて之を實行する亦大に可なり、而して學窓枯坐單り之を行ふときは雷に獨を慎むの方法として剴切なるのみならず、孤身隻影、十方三世の佛陀に交りて髣髴として聖影に伴ひ、恍惚として靈境に遊ぶことを得む、若し夫れ暑を山水の間に避くる人は溪聲山色の説法を味ふべく、たとひ、紅塵熱間の間に在る人も古の所謂心頭を滅却すれば火も亦涼しの見地に處することを得べき也。

吾人は神聖なる佛陀教團の古制を追懐すると共に吾人が修養上最も注意を拂ふべき一問題を得たり曰く、信仰と戒律、即是也。

眞實なる信仰には必ずや、眞實なる戒律之に伴ひ、眞實なる戒律は必ずや眞實なる信仰より來るもの也、然れども戒律の弊たるや常に形式に流れ安く、信仰の弊や放縱に失し易し、若し戒律にして其生命を蟬脱し、徒らに化石して其形骸のみを存するに至る時は必ずや熱烈なる信仰を以て一撃の下に之を打破し了せずむは、到度清新なる宗教の活泉を呼び來る能はざる也。故に古來、律法複雜を極め、縦横網の如く織り成せるに至りてや、必ず直截心を刺すが如き信仰を以て根本的に之を切り開かざるべからず、而して一旦信仰圓熟して安慰を得る其極に達せば悠悠々々自適其弊や必ず寬漫に失し安し、若し此潮流にして年所久しきに涉るときは、信仰の生命遂に枯死し去りて之に伴ふ森嚴なる自覺を暗まし去らむとす、此に於てや再び嚴格なる戒律主義起りて、秋霜烈日の如く、切言勵行人をして肅然として襟を正さずむは止まざらむとす。是れ眞實なる信仰に伴ふ眞實なる戒律主義なりとす。

古今東西の宗教史を繙くときは此二主義の消長は歴々として観るが如し、吾人は先づ基督教史に之を見むか、基督の起るや、

全然猶太教の律法主義を破壊して來れり、彼は其祭祀を破壊し、儀式を破壊し、習慣を破壊して、其内に潜める愛の福音を攫みて信仰を復活し來れり。羅馬教會起りて熱烈なる信仰を以て百般の經營を成就し、殊に修道院主義起るに及び、實行極端に達して苦行に陥るに至れり、年所久しきに及びて純然たる形式的戒律主義に陥り、教會は俗權の中心となり、宗教は儀式の遺骸となれり、是れルーテルが信仰の猛火を呼びて徹頭徹尾羅馬教會の根底を焼き盡し、無戒律主義を以て、僧尼獨身の制度を破壊し、教會の神權を否定して聖書の教權を樹立し、千有餘年の制度を一朝にして灰燼に附し去りし所以也、而して彼のカルビンの如きは吾人は寧ろ眞正なる戒律主義を代表するものと言はむとす、彼は瑞西ゲンフ府に於て理想的の神政共和制を實行せり、而して彼の影響やジョン、ノックスとなりて蘇格蘭の宗教改革となり、清教徒となりて英蘭教會の空氣を一洗し去り、眞摯の氣、質樸の風、一種森嚴なる戒律主義を起し來る、若し夫れ、オリヴァー、クロムウェルに至りては其神政主義を極端に實行したるものと謂つべし、蓋し宗教史に於ける信仰と戒律の二者消長の踪跡を尋ねるに趣味頗る深長なるものあるを感ぜずむばあらず。

今や吾人は翻て佛教史上に於ける此二主義の活躍せる面目を書き來らむか抑々大聖釋尊の印度婆羅門の律法主義苦行主義を破壊して起り給ふや、彼の基督教か猶太教を破壊して起れるものに比するに猶一層根本的なるものあり、基督は猶太教の律法を排して起れり、然れども猶其一神教の框の中に發達せり佛陀は一神教の根抵を覆へして、根本的實驗の見地に立ち玉へり、彼は實在の一神を排して寧ろ佛陀自身の人格を以て之を補ひ玉へり、佛陀は人間にして佛位に達せるもの、是れ佛教本來の面

目、何ぞ基督神論の困難を要せむ亦何ぞ佛教を指して有神論と稱するを得む、既に此の如く根本的に婆羅門教の教理と律法とを顛覆して飽迄解脱の實驗に立ち玉へり、然れども其佛弟子の實行に於て間々缺損する所あり、此に於てや、佛陀は彼等の行為を整へしめむが爲めに、過失ある毎に禁戒を垂れ玉ふ、是れ眞實なる道德的訓戒にして、決して之を以て解脱に達し、信仰を得るの手段と爲し玉ひしにはあらざる也、故に佛教の戒律なる者は佛陀の信仰に伴ふ生ける佛陀の教訓なり、解脱の實驗に伴ふ内的徳義の制裁なり、吾人が稱して眞實なる信仰は眞實なる戒律を生じ、眞實なる戒律は必ず眞實の信仰より來らざる可からすと云ふ所以のもの實に此に在り。

此の如く生ける信仰と生ける戒律とは印度支那日本に流れ來れる久しき佛教史の河中に於て化石し去りて、徒らに形骸を墨守して、殆ど無意義なる苦行の状態に陥るに至れり、親鸞聖人が佛教史上破天荒の大變革を厲行し、自ら無戒名宇の比丘を標榜して、佛陀救済の唯一の徳音を宣説し、念佛無碍の利剣を振ふて一撃の下に八萬四千の法門と二百五十戒五百戒の律法とを切り去り給へり、蓋し是れ信仰復活の一大源泉たらずむばならず、之を彼のルーテルが基督教に於て無戒律を唱へたるに比較するに歴史上の關係猶一層極端なる改革たらずむばならず、然れども其眞精神に至りては確かに是れ釋尊の眞面目を攫み來りたるもの、聖人が戒律を排し、祈禱を排し迷信を排し玉ひたるもの釋尊が婆羅門の律法を排し、苦行を排し、祭祀を排し玉ひたるものと其揆を一にするものと謂つべし、此の如くして聖人の胸中に閃けるものは無限の光明也、永久の生命也、唯一佛陀の靈勅也、此の如く聖人の内心に生ける佛陀の天命は能く聖人の人生觀を描き來りて清新なる家庭と健實なる人格を作り出せり、後世少しく寛漫に失す乃ち蓮如上人出づるに及び森嚴なる力行主義を唱へ出せり蓋し是れカルピンの律法主義に比較するを得むか、之を要するに釋尊の宗教、親鸞聖人の信仰、何れも解脱の經驗、信仰の偉力を以て形式的戒律を破壊し去りて、再び清新健全なる規律的生涯を復活し來るものと謂つべし、蓋し宗教史上此の如き必然の經過を取る所以の者、必ず其根柢たる内心信仰の經過に於て之に相應する一大事實の存在するに職由せずむばならず也、吾人請ふ内殿の秘奥を穿ちて其玄を鉤り噴を探らむかな。

今や吾人は進みて信仰問題の見地に立ちて信仰と戒律の問題を解決し去らむとす、蓋し信仰を以て形式的の戒律を破壊し去る所以のもの、之に先ちて必ずや、其人戒律的修養を以て唯一解脱の方法なりと確信し、眞摯の態度を以て飽迄之を厲行し、遂に其功なきを悟りて、翻然絕對の光明に融和するものは即ち偉大なる絕對の信仰に非ずや、釋尊の道を求むるや六年の久しき一麻一米の苦行を修し、身體衰羸其極に達す、一朝翻然として苦行の功なきを悟り、スチャータの捧ぐる牛乳を飲み尼連禪河に沐浴し、遂に樹下石上に座して降魔成道の一大實驗に入り玉ひたるに非ずや、親鸞聖人の道を求むるや般若、華嚴、法華を研鑽し、法隆寺磯長四天王寺に參詣し、彌陀普賢を念じ、文殊の眞言を誦し、一心三觀三密瑜珈の觀法を試み、山王權現及び六角の精舎に祈念を捧ぐ、前後十年戒律修行の結果遂に解脱に益なきを知り、胸中の煩悶之を遣るに由なく、吉水禪房の説法によりて遂に絕對他力の信心に入り玉へり、吾人は信ず、抑々釋尊の婆羅門教に於ける、自ら之を實行して、其價値の如何を悟りし玉へる時既に大悟の自覺は東天の微白を來せる也、又親鸞聖人の聖道門に於ける亦出來得べき極點まで努力し、遂に自力の爲すなきを自覺し玉へる時、他力淨土の門戸は自から開き來る也と、故に戒律は信仰の爲めに何等の益する所なし、然れども其益するなきを悟りしむるは是れ偉大なる信仰を迫り出すの道にあらずや。

聞説らく、神秀自ら其悟れるの境を歌ふて曰く、身是菩提樹、心如明鏡臺、時々須拂拭、勿令惹塵埃と、實に是れ穩健誤なきの修養也、然れども、吾人試みに自己の心頭に向て之を味ひ來らむ、嗚呼渺たる五尺の軀、是法身の慧命を宿すの樹にあらずや、方寸の心靈洵に森羅萬象を照すべき鏡にあらずや、然れども此樹や時ありて苦惱の風雨に犯されて菩提の花を妨げ、此鏡や煩悶の曇に蔽はれて眞如の月を蔽ふ、吾人は此靈臺に向て一點の曇を止むるを欲せず、故に晝夜之を拂拭して塵埃を惹かしめざらむことを勉む、然るに埃を拭へば益々埃を惹き、塵を拂へば塵却て來る、此に於て戒律的修養の益々意義なきを悟りし來る、看よ有限の数は如何程積むも有限の域を脱する能はず、漸教の功果は遂に相對的修行たるを免れざる也、如かず吾人は直ちに絕對の光明を直觀して、拭ふべき埃なき、拂ふべき塵なきの靈境に遊ばむかな、六祖曰く、菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃と嗚呼是戒律的修行を脱落して本來虛靈の靈臺を開き來りたるものに非ずや。

善導大師至誠心を釋して曰く、外に賢善精進の相を現して、内に虚假を懐くを得ざれど、蓋し是れ外に賢善を現して其内の虚偽なるを戒むる也、曰く、汝が内心亦外儀の如く賢善たれ、虚偽たること勿れと也、實に是れ内外至誠たらしめ、身心兩がら眞實たらしめむと欲する也、此の如きは吾人最終の理想、大師至愛の鞭撻として求道者の日夜服膺すべき金言也、然れども吾人果して外儀に示すが如く内心清淨なるを得るか、言語動作果して其心に懐くところを暴露して修飾なきを得るか、吾人審さに吾人の行動を省る、外剛にして實に其内柔なる也、言清ふして行頗る濁れる也、洵に偽にして善を飾るもの、所謂偽善の一塊肉たるを免れず、自ら内心を披瀝して懺悔すれば懺悔忽ち偽善の色を帯ひ、泣て佛前に跪けば涕泣既に殊勝の貌を現す、吾人心を清ふせむと欲せば益々濁り、形を正ふせむと欲せば爛々亂る、我、我慢を捨てむと欲す、一我去る時忽ち他の一我來る、濁れるの我は濁れる我を清むるの資格なく、清めむと欲するの心は既に濁れる心にあらずや、手を洗へば手益々汚れ、聲を制すれば聲彌々加はる、起つも偽善なり、行くも偽善なり、吾人苟も肉の塊として存するの限りは即ち罪惡の塊なり、吾人此の如く意識するの限りは悉く偽善の結晶なり、大師の訓戒頗る剴切、吾人の肺腑を貫くものありと雖、吾人は毫厘だも之れを實行し得べしと謂はむや、大師の訓戒は吾人をして煩悶せしむるの苦言なり、大師の鞭撻は吾人を惱亂せしむるの桎梏なり、此に至りて天下の廣き、宇宙の遠き遂に此身を置くに所なからむとす、親戀聖人乃ち自己心中を暴露して曰く、外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚偽を懐けば也と、汝は汝を修飾するを止よ汝は汝を在るが如く表白せよ、看よ汝の内心は貪瞋邪偽奸詐百端にして惡性止め難きにあらずや、看よ汝が胸底に潜めるものは毒蛇にあらずや汝が懷に抱けるものは惡しき蝎にあらずや、此に至りて吾人亦何の爲す所ぞ、唯佛陀慈愛の慈懷に抱かれて大悲攝取の光明の中に眠らむのみ、是聖人の胸中に宿り玉ひし佛陀なり、聖人の心中に味ひ玉ひし靈勅也聖人此の如き罪惡の自覺を抱き此の如き慈愛の救済をさく、法然上人にすかされまゝらせて地獄に落ちたりとも更に後悔すべからずと言ひ放ち得る一大確信を攫めるもの實に茲に在り、宜なる哉法然上人一場の法話は十有余年戒律主義の効果を一朝に破壊し去り、生殺與奪の運命、一に法然上人と同じくし、全身を投じて唯無碍の一道に乗托するに至れるや、嘆異抄は實に此無戒律主義の極所を描き、力強き信仰を披瀝する者、讀む者其用意なくむばあらざる也。

此の如く形式の戒律を破りて生れ來りたる信仰は再び生ける戒律を生ず、即ち一たび胸中佛陀を寓する者は必ずや大なる力を其行爲の上に下さるべからず、戒律は生ける釋尊の禁戒なり、吾人が信する偉大なる佛陀豈森嚴なる訓戒を吾人に賜はらざるあらむや、看よ佛天は昭々として冥鑑を垂れ玉ふ、吾人肅々として一舉一動を謹まざる可けむや、此に於ける無戒律の絶對他力の信仰の上に無文律の生ける戒律を生じ來る、是大無量壽經に五惡を戒め、五善を勧め玉ふ所以也、經に曰く正心正意齋戒清淨なること一日一夜すれば無量壽國に在りて善を爲すと百歳せんに勝れたり故は如何、彼佛國土は無爲自然にして皆諸の善を積みて毛髮の惡なければ也と蓮如上人の如きは自ら此見地に立ちて身を以て人を帥むる者、御一代聞書は實に上人が力行の實驗を寫せる者、確かに無文律の禁戒、吾人が嘆異抄を味ふと共に必ず座右一日も缺くべからざる者、眞個に是れ生ける信仰より復活せる生ける戒律と謂つべし。

最後に吾人は自己の經驗より信仰と戒律との問題を考案すべし。吾人は自己の罪惡を感じ、深き煩悶と苦き實驗を経て遂に親しく慈悲の佛陀に接することを得たり、人此場合に處す、唯一絶對の慰藉者を得れば可也、繁瑣なる戒律主義は此等の煩悶に向て何等の功なきのみならず寧ろ苦痛なり、煩悶の青年藤村操、フランクリンの自修法を以て自己の行爲を律せむと企てしが如き、如何に其苦を加へしかを想像して同情に堪へざるもの也、世人或は嘆異抄の無戒律主義を極むるを見て、或は倫理に害なきかを疑ふ、然れども是杞人の憂、蓋し煩悶の極を経験し、罪惡の實感、確かに奈落釜底の人たるを自覺するの人にあらざるは嘆異抄の靈火は其胸中に點せざる也、恰も是れ熱度未だ發火に點せざる限りは如何なる潜在力を有せる火薬も爆發せざるが如し、此の如き人は未だ宗教を味ふべき熱度に達せざるもの、何ぞ危險なると否とを問ふの資格あらむ、若し之を味ひ得るの人は罪惡自覺の極に達し、既に苦悶の獄底に沈倫せるもの、此の如き絶對的救済の德音にあらずむは何ぞ徹頭徹尾之を慰藉することを得む、若し一たび此救済の靈火に接せむか、恰も是れ、雷電一閃、天柱を折り地維を絶つが如きもの、罪惡燒く可く、苦悶燒くべく、人生の意義を一變し、世界の根柢を見出すべし、實に信仰は内心に於ける一大革命也、精神界に於け

る。一。大。切。火。也。此。に。至。り。て。彼。の。醜。態。繁。瑣。なる。形。式。的。戒。律。主。義。の。如。き。は。恰。も。是。れ。東。天。紅。に。し。て。小。星。光。を。失。ひ。、大。海。の。鹹。味。百。川。の。清。濁。を。問。は。さ。る。が。如。け。む。の。み。

此の如く信仰の一念は眼中罪惡なく、戒律なし、然れども、内心の改革は人生の復活を意味し來り、信仰の生命は吾人新なる生活を牽めしむ、嗚呼悠々たる人生の征途夫れ遠き哉、夫れ千里に行くものも必ずや足を一步に起す、信仰の生涯は規律ある生活ならざるべからず、吾人の經驗する所によるに一たび大苦悶を経て信仰の靈火に接するの人は、其態度頗る眞摯にして精神亦洗ふが如くなるも、恰も迅雷風烈の後家屋樹木等其秩序を失ふが如く、必ずや若干の訓練を経るに非れば規律的生活に入ること能はざるべし、是れ蓮如上人が切言忠告する所にして、亦降魔大覺の經驗を味ひ玉ひし佛陀が嚴肅なる戒律を制して、弟子を訓戒し玉ひし所以なるべし。

此に至りて吾人は佛陀在世の教團の生活を追想して一種言ふべからざる神聖なる感に撲たるもの也、夏安居の制の如き確かに則るべき夏季修養の清規也、吾人は戒律を以て信仰問題を律するの頗る割切ならざるのみならず寧ろ殘酷なることを主張すると共に、釋尊在世の清新なる聖制戒律を以て自力企て及ぶべからざるものとして全然擲て日常生活の上に其精神を服膺せざるが如きは實に無慚無愧の徒たることを痛言せむと欲するものなり。

大寶積經に曰く彼の二菩薩精進を行するの時千歳の中に於て未だ會て念を起して臥せんと欲せず、未だ會て念を起して坐せんと欲せず、未だ會て一返も屈身躡蹠せず、未だ會て念を起して飲食の鹹淡、甘苦、辛酢、美惡を稱量せず、未だ會て着る所の衣服を再び易へず、未だ會て縁を親里の若は父若は母、兄弟姉妹及び諸の眷屬に起さず、未だ會て仰て虚空日月星宿雲霞等の色を觀ず、未だ會て念を起して陰影の處より光景の處に至り、炎熱の處より清涼の處に至らずと雲棲大師慚愧して曰く、此大菩薩の事、凡夫の及ぶ所に非ず、是人をして菩薩千歳中の無念なるを知らしめむる也、而るに我等一歳の中、一月の中、乃至一時の中尚行する能はず、寧ろ愧ぢらむや、更に勉力せずして少分を行するも亦難き哉と修養家の泰斗雲棲大師にして此言あり、吾人亦何をか言はむ、況むや、恣に臥し、恣に坐し、恣に椅子に凭り、恣に衣を易へ、故郷に歸省して父母に侍し、天然を賞して其美を歌ひ、又暑を海濱に避け、居を清風の間に卜するに於てをや、吾人稱して修養と云ふ、寧ろ言の誇大に失するを恐るゝもの也、冀くは彼二菩薩の冥鑑を仰ぎて努力奮勵夏安居の聖模を追ふて、其萬分が一を實行し、聊か感謝の誠を致し、以て規律的生活の訓練に供せむかな、深く自ら誓ひ、且つ同信の道友に告ぐと云爾。

### 他力的奮勵主義

藤井 專 隨

千。百。の。砲。丸。耳。邊。に。響。く。を。聞。き。慣。れ。し。勇。士。も。時。と。し。て。脚。下。を。掠。む。る。落。葉。に。駭。か。さ。る。と。あり。、奇。異。の。水。陸。を。跋。渉。し。て。會。て。迷。は。ざ。り。し。探。險。家。も。時。と。し。て。近。郊。の。散。歩。に。路。を。失。ふ。と。あ。り。、最。も。敬。虔。な。る。淨。利。の。尼。僧。も。亦。時。と。し。て。普。通。の。娘。の。如。き。心。を。懷。く。瞬。間。な。き。に。あ。ら。ず。、最。も。思。慮。深。き。廟。堂。の。君。子。も。亦。月。に。一。度。は。隠。れ。な。き。痴。漢。が。彼。よ。り。も。遙。に。恰。慚。な。る。の。日。を。有。す。る。もの。な。り。と。、詩。人。テ。ョ。ッ。ケ。の。爛。眼。、人。の。弱。點。を。看。破。し。來。り。て。、また。遺。憾。な。き。もの。と。い。ふ。べ。し。彼。の。勇。士。に。し。て。脚。下。を。掠。む。る。落。葉。に。駭。き。、彼。の。探。險。家。に。し。て。近。郊。の。散。歩。に。路。を。失。ひ。、彼。の。尼。僧。の。時。あり。て。娘。心。を。懷。き。、か。の。君。子。の。時。あり。て。痴。漢。に。一。籌。を。輸。す。る。所。以。の。もの。は。何。ぞ。や。、蓋。し。不。用。意。の。時。な。れ。ば。な。り。、平。素。注。意。に。よ。り。て。隠。蔽。さ。れ。つ。ゝある。吾。人。の。弱。點。は。、た。え。ず。吾。人。の。不。用。意。を。狙。ひ。て。其。の。頭。を。擡。げ。來。る。もの。な。り。是。れ。吾。人。自。家。に。於。て。日。常。經。驗。す。る。事。實。に。あ。ら。ず。や。、彼。の。勇。猛。精。進。道。を。行。ひ。德。を。進。め。、鍛。鍊。修。養。已。に。一。個。の。美。風。良。習。を。第。二。の。天。性。と。爲。し。得。た。る。人。に。在。り。て。す。ら。、猶。且。時。あり。て。古。き。馬。脚。を。露。は。し。、忘。れ。た。る。野。性。を。蔽。ふ。能。は。さ。る。瞬。間。を。經。驗。す。る。と。少。な。か。ら。ず。と。せ。ば。、若。し。吾。人。に。し。て。始。め。よ。り。修。養。に。向。て。何。等。の。工。風。を。も。試。む。る。と。な。く。、た。ゞ境。遇。の。導。く。所。と。、天。性。の。赴。く。所。と。に。一。任。し。た。ら。む。に。は。、吾。人。の。到。達。す。る。所。果。して。如。何。ぞ。や。、吾。人。は。修。養。問。題。に。對。す。る。現。代。青。年。の。態。度。に。大。凡。二。種。ある。を。

認む。其。一。は。以。爲。ら。く。、吾。人。は。必。ず。し。も。自。己。の。凡。庸。に。満。足。す。る。もの。に。あ。ら。ず。、然。れ。ど。も。人。々。自。ら。天。泉。の。ある。あり。、徒。ら。に。氣。を。高。く。し。意。を。壯。に。し。て。大。聖。偉。人。を。冀。ふ。と。も。、是。れ。實。際。に。於。て。吾。人。の。學。ん。で。容。易。に。到。達。せ。ら。る。べ。き。境。地。と。も。思。は。れ。ず。、さ。れば。吾。人。は。當。さ。に。平。穩。な。る。人。生。を。描。き。出。す。を。以。て。甘。ん。ず。べ。き。な。り。且。つ。夫。れ。吾。人。は。已。に。高。等。の。教。育。を。受。け。、又。穩。健。な。る。常識。を。得。たり。、此。の。高。等。常識。に。訴。へ。て。以。て。日。常。生活。を。統。理。せ。ば。決。して。大。なる。失。態。ある。へ。か。ら。ず。、か。く。て。徐。々。穩。健。な。る。習慣。を。養。ひ。行。か。ば。、吾。人。人。間。と。し。て。の。品。位。は。自。ら。保。た。る。べ。し。是。れ。已。上。に。修。養。と。稱。し。て。、道。德。上。若。く。は。宗。教。上。の。特。殊。の。訓。誡。を。奉。じ。、以。て。行。爲。を。律。し。性。向。を。矯。む。る。の。要。何。處。に。か。ある。此。の。如。き。は。畢竟。徒。勞。に。屬。せ。ん。の。み。吾。人。は。宜。し。く。吾。人。固。有。の。性。能。の。自然。の。發。展。に。任。す。べ。き。な。り。と。其。二。は。謂。ら。く。、吾。人。明。媚。の。山水。に。對。し。、清。朗。の。風。月。に。嘯。く。に。當。り。て。は。、胸。中。また。一。點。の。汚。濁。を。止。め。ず。、此。時。此。心。、聖。賢。と。い。へ。ど。も。以。て。加。ふる。な。げ。ん。然。り。と。い。へ。ど。も。吾。人。の。外。界。は。、常。に。明。媚。の。山水。と。、清。朗。の。風。月。と。に。由。り。て。圍繞。せ。ら。る。ゝに。あ。ら。ず。、時。に。聲。利。に。誘。は。れ。、時。に。疾。病。に。訪。は。れ。、時。に。恩。愛。に。擁。迫。せ。ら。る。之。れ。と。相。響。應。し。て。吾。人。の。内。界。に。は。七。情。往。來。し。て。、三。毒。出。没。す。此。の。如。く。し。て。吾。人。は。愁。雲。暗。嶺。風。濤。險。惡。の。悲。境。に。陥。ら。ざ。る。を。得。ず。、所謂。人。生。の。苦。悶。な。る。もの。是。れ。な。り。借。問。す。吾。人。は。如何。に。し。て。此。の。外。界。の。誘。惑。を。征。服。し。、此。の。内。界。の。苦。悶。を。脱。却。し。て。、か。の。天。空。海。濶。の。別。乾坤。を。開。拓。す。べ。き。乎。曰。は。く。、先。德。向。上。の。芳。躅。を。模。範。と。し。大。聖。眞。悟。の。妙。境。を。理想。と。し。て。銳。意。奮。進。す。べ。き。ある。のみ。是。れ。が。方法。と。し。て。は。、前。聖。古。德。の。遺。訓。を。奉。じ。、之。れ。を。日。常。の。經驗。

に照らし、以て一步は一步より向上の途に進むべきなりと。前者は比較的天賦平穩なる理性的青年に多く、後者は比較的天賦激越なる感情的青年に多きが如し。前者は一種の現實主義若くは放任主義にして、余は之れを自然主義と呼ぶ。後者は即ち理想主義若くは向上主義にして、予は之れを奮勵主義と名けん。

自然主義と奮勵主義、吾人は應に孰れに適從すべき乎。蓋し自然主義の主張する所は理論上必ずしも成立せざるにはあらざるべし、しかのみならず、生來冷靜なる頭腦を有し、且つ終始單純なる社會にのみ其身を置かんとする消極的青年に在りては自然主義も亦一種無害の主張なるべし。然れども此の如きは誠に少數に於て不可なきのみ。若し夫れ他方に熱血と紅涙とを有し、且つ終始複雑なる社會に其身を置かんとする多數の積極的青年に在りては、吾人明かに自然主義の無意味を斷言して憚らざるものなり。吾人固より人性の善なるを信じ且つそは或程度まで周圍の啓發に由りて自然に發展するものなることを否定せず。吾人は此の點に於て自然主義者と一致するものなることを明言す。然れども之れと同時に吾人は吾人本有の靈性の自然的無意識的發展にのみ一任せず、何等かの方法に由りて之れが發達を補助することの必要と有功とを認むるものなり。即ち吾人は吾人精神界の意識的修養の必要と有効とを認むるものなり。少くとも吾人は吾人が遺傳と境遇とに由りて吾人の靈性に附着せしめられたる不幸なる傾向を意識的修養に由りて洗滌若くは輕減し得るものなることを信するものにして、若し然かせざる時は、然かするに由り

て到達せらるべき程度と同様の程度まで吾人の靈性を發達せしむること能はざるか、或は之れと同様の速度に由りて發達せしむること能はざるか、或は幾多の不幸なる點を加へて漸く發達せしむることを得るか何れかに過ぎざるものなることを認むるものなり、此の意味に於て吾人は意識的修養の必要と有効とを信するものにして所謂奮勵主義の基礎實に此處に存す。

第十九世紀の思想界を風靡せしめたるシヨペンハウエル曰く、人の品性は定數なりと。其意謂らく、品性は人の全生涯を通して一定不變なり、是を以て人の品性上の欠點を指摘し、道德的訓誡に由りて欠點を消滅して品性を改造せんと企は、恰も鉛を鍛錬に由りて黄金と化せしめ、樞を培養に由りて梅と變せしめんと欲する企に比して何の撰ぶ所ぞ、個人の性格は天與なり。技術に由りて若くは偶然の結果として成れるものにあらず、自然の所産なり、遺傳の結果なりと。即ち氏は前世の理性万能主義に反して、個人の無限的發展を否定し、教育の可能を否定し、修養の無効を主張せるものなり是れ疑もなき謬見にして人を誤る少小にあらずなり、吾人はシヨペンハウエル氏の盛名の下に此の說に對して沈黙を守ること能はざるを遺憾とす。最近生物學の造詣によれば、遺傳せらるるものは只萌芽のみ。己に發達せる性能特質が其の發達せる形の儘にて子孫に傳はるにあらず。たゞ同様の性能特質が發展し易き傾向を傳ふるのみ。而して此の遺傳せられたる傾向が實際に發展せんが爲めには、外部の啓發誘導を俟たざるべからず。是の故に假令或る性質の發展すべき傾

向を傳へたりといふとも、若し外界より相應の影響を加へ、適當の機會を與ふるとなくんば、遂に其の發展を見ずして終らん。之れに反して、外界の事情如何によりては、已に有する傾向の反對の性質さへも發達せしむるとの可能ありといへり。即ち最近の生物學は生物の可變性を證す。此の可變性の存在に由りて初めて生物進化の可能は證せらる。されば吾人は、カント氏等と共に修養の万能を信する能はざると同時にシヨペンハウエル氏と共に修養の無効を信することも亦能はざるなり。要之、遺傳は外的境遇と内的努力とを擧げて無効に歸せしむる程の強大なる勢力あるものにあらず。されば吾人は須らく自己の稟性傾向を察し、其の發展せしむべきものと、滅絶せしむべきものとを辨知し、爲めに必要な境遇を迎へ、努力奮勵以て猛進せば、其功果計る可らざるものあるべきなり。若し之れによりて幾分たりとも吾人稟性の自然の發展に影響を加へ、幾分たりとも多望の方向に發展せしめ得るの事實あらば、それだけにも決して修養の等閑に附すべからざることを信じて銳意奮進すべきにはあらざる乎。此處に於いて吾人は益々修養上自然主義を否定して奮勵主義を取らざるべき決心を固くせざらんと欲するも能はざるなり。

已上吾人は廣義の修養に對する自然的態度を排斥して、奮勵的態度を主張せり。是れより吾人は狹義の修養を論じ、進んで信仰問題に入らむと欲す。

吾人は已に自然主義を排して奮勵主義を取れり。借問す奮勵主義の宗教的意義如何。多くの人には先づ容易に想像せ

らるべし、修養上の自然主義は、宗教としては必然的に他力教に歸着し、修養上の奮勵主義は、宗教としては必然的に自力教に歸着すべしと。然れども吾人の取る所は、寧ろ其の正反對に出るものなり。自力教と他力教、自然主義と奮勵主義とを配合すれば、玆に四種の可能的場合の存するを見る。曰く、第一、自力的自然主義、第二、自力的奮勵主義、第三、他力的自然主義、第四、他力的奮勵主義は是れなり。第一の自力的自然主義は、實踐上最も功果の薄弱なるものにして老莊の所説は其の適例なり。第二の自力的奮勵主義は普通の道德的向上主義にして、所謂自律的倫理、及び自力的宗教は凡て之れに屬す。其の人生を擧げて、孤軍奮闘の中に終らんと欲するの氣概は、吾人之れを壯とせざるにあらず。然れども此の如きは實際上吾人々類の果して克く久しきに堪へ得べき生活なりや疑なき能はず。吾人をして忌憚なく言はしめば吾人は此の如き生活に於て、到底人生の眞意義を發見する能はざるなり。第三の他力的自然主義は、普通の他力教は即ち是れなりといひ得べき點なきにあらずれども、吾人は眞の他力教を此の如く解する能はざるなり。他力的自然主義は、其れ自身に於ては、何等有害の要素を含むものにあらずれども殆ど凡ての場合に於て看過すべからざる弊害の附隨するものあるを如何せん。第四の他力的奮勵主義は是れ吾人の今方に主張せんと欲する所のものにして、消極的には何等弊害の附隨するものなく、積極的には廣大深遠なる優點を有す。洵に是れ宇宙間最高至上の宗教なり。

奮勵主義を取れり。借問す奮勵主義の宗教的意義如何。多くの人には先づ容易に想像せ



他力的奮勵主義を説くに當りて、先づ吾人をして修養と信仰との關係に付て一言せしめよ。そも信仰は絶対的のものなり。得たるものは絶対に得たるなり、得ざるものは絶対に得ざるなり、相對的の信仰は、決して嚴密の意義に於ける信仰にあらず。得ると得ざるとの境界は、唯宿善開發の一念に在り。大悟一番の瞬間に信仰は絶対的に獲得せらる。一念の信仰は永久の覺醒なり。之れに反して修養には無量の段階あり。信前信後凡て修養を要す。修養を以て只信仰に到るの手段と解し、一たび信仰に到達せば、修養のこと此處に畢りぬ矣と考ふるが如きは、修養の眞意義を解せざるものなり。然れども信前の修養と信後の修養とは、其間また自ら感想の異なるものあるべきは勿論なり。吾人の所感によれば、信前の修養は或る精神的傾向の養成を意味し、信仰は此の精神的傾向が或る神來的靈感の下に遺憾なく完成したる状態に名づけ、信後の修養とは、此の信仰を基礎として日常生活の上に絶へず新意義を發見しつゝ、進行する所の靈的經驗を意味するものなり。之れを約言せば、信前の修養は信仰に到達せんとするの奮勵にして信後の修養は信仰より漏出するの奮勵なり。此故に、信前の修養は、猶ほ自力的奮勵主義の地位に立つものにして、信後の修養に至りて始めて他力的奮勵主義に立つものと言ふべし、而して吾人理想的の宗教的生活は、寧ろ後者に存するが故に、吾人は他力的奮勵主義を以て、直に吾人の生活主義と爲さんことを主張するものなり。

吾人は更に稿を繼て、吾人の所謂他力的奮勵主義の實際的面目を描出せん。

の世に於て生活する有様を見るに、入退八進と言ふ事がある、退くとはどういふ事かと言へば何事の場合にても懈怠の人は少し病氣があるからして今日は修行を止めやう、幸に病氣が癒たが病後の療養は大切であるからして今暫く修行を休まうろの他用事あれば用事の爲めにやめる用事終れば疲勞したからやめまた空腹であるから修行は出来ぬ満腹すれば修行し難いからまたやめる、何にかにつけて修行を怠る、懈怠の工夫計りして居る事を八通り上げてある、又その懈怠に反對して八通りの精進が擧げられてある、精進の人は少しの病があつてもいやこれ位の病は何でもない、また用事があるにしてもその用事にとり掛るまではやらねばならぬ、用事がすめば自分分は久しく俗事に關りて居つた爲めに修行が出来なかつたが今はその用事も終つたから幸ひであると言つて直ぐに元の修行にとりかゝる、これをいつて見れば懈怠の人は一步は一步より懈怠に陥入り精進の人は一步は一步より精進を勵む様になる、精進は即ち感謝の念より生ずるのである、平生修養に志ざるゝ方は大に考へて貰はねばならぬ、私はこの書を讀みました時に世間の事は何事によらず總て感謝の念を以てすればよいのであると考へた、大師は大なる修養家である、この書中には尙幾多の修養に關する言葉が集めてある、一切の事もし不足の考を以てすればつまらないが若し感謝の念を以て進めば一杯の水にも無限の味があるその他總ての事に無量の意義が生じて来る艱難の淵不幸の境にも感謝の眼を通ずれば人生の色は茲に一變するのである、粗末なるものを食するにも不足を言はずに難有食すれば粗食も粗食でないのである、

日曜講話

感謝の念

近角常 觀述

私は先般没くなりました父親の百ヶ日を營む爲めに歸國致しましてその後尾州の方へも赴き漸く今日上りました扱本日この題は感謝の念であります、私は從來本郷の求道學舎でも又此求道會でも常に御話し致しますのは六ヶ敷い理屈の方面ではなく又教理の方面でもない、自身の實感自身の實驗の方面を御話する事にして居りますが今日もそれについて御話し致す心算でこの題を出して置きました、感謝の情は實に言ふ可からざる奥深い味があつて此情を以て常に進んで往けばどんな人でも向上の道に進む事が出来やうと思ふ、處世の事は總て考へやう次第で何でもなる例へば茲に一杯の水を人から恵まれたとしても一方から言へば水の一杯位はツマラヌものとも見える、併し又一方から見れば一杯の水一滴の水でも若しこの感謝の念を以てすれば満身の情を以て受ける事になる我々の生活の上に於て少なくともこの感謝の念を以てすれば限りなき心の満足を得らるゝ又これが爲めに向上の精神は益々進められるのである、私は此頃支那の雲棲大師の書かれた書を讀んで最も適切な教訓を得ました。その教訓と言ふのは大師が長阿含經にある事を引用せられたのであるそれは人がこ

る、かの釋尊が出家せられた時一國の太子の身の上でありながら人に食を乞はれた、さてそれを食べやうとせられたがドモ惡臭があるやうに感ぜられてすぐ食べる事が出来なかつたそこで熟々思案せらるゝに此身はこれ地水火風の四大の集念である我は唯これを養へば足るのである更に不足を言ふ可きに非ずとて喜んで享けられて布施に對して非常な味を發見せられたのである、我々はまたこれによりて大なる教訓を感じさして貰ふのである即ち獨り釋尊のみならず凡そ宗教の開祖ともいはるゝ人々は多くその當時に容れられず種々の迫害をうけられしものなるがしかし決してそれ等に對して不足を鳴らす所ではないそれ等のうちにかへつて無限の味を見出されたのである、嘆異鈔の中に

故聖人のおほせにはこの法をば信する衆生もあり、をしる衆生もあるべしと佛ときをかされたまひたることなれば、われはすてに信じたてまつる、またひとありてをしるにて佛説まことなりけりとしられさふらふ、しかれば往生はいよ

〜一定とおもひたまふべきなり、

もし人がろしらぬといふならば佛説に虛妄あるかの疑があるのである、然るにをしる人もあればこそ佛説には虛妄なしと愈々難有い事と感ずると、この感謝の念は實に人生に對する味を全く一變せしむるのである、法を求むる上に禪家では懈怠を誠しむるために種々の打撃を師匠より受けるのであるが茲に若し感謝の念がなかつたなら折角の打撃も更に何の意味もない、親鸞上人の教へて言はゞこの感謝の念の源は何かと

言へば即ち信仰である、吾人信仰の根底に立つ時は人生の意

味が益々深くなる、世間には宇宙の意匠論と言ふがあつて宇宙人生は一種の目的の爲めに造られたのであると言ふ議論がある、世界は實に都合よく出来て居る又總ての事が微妙に出来て居る、是全く或目的の爲であると言ふ、私も美はしい草木や麗はしい景色に對する時は如何にも美妙に感じはするがしかし目的の爲めに造られた者であると言ふ考はなかつた、私が思ふに目的論は科學的研究等の微細なる點より來たのであるが信仰の目より見れば宇宙殊に人生が絶對なる佛陀慈悲の救済と云ふ事の爲に漸々善い方へ導かるゝ而して人生の總てのものに意味を見る事を感じる様になる、又或見方のやうに人生は因果の道理によつて出来上つたと云ふはまだ淺見である、結局は信仰である、信仰の出来るまでは幾多の艱難苦痛に逢はねばならぬ、長者窮子の譬のやうに親は子の爲めに非常な苦心をして居るのに子は毫も之を知らざるが如く吾々は佛の力佛の慈悲を全く忘れてしまつて居る爲めに恰も山間の谿流が巖に激し屈折迂迴して遂に渺茫たる平野に出て漸く洋洋たる流となるが如く人は幾多の辛酸をなめて始めて人生の如何なるものなるか自己の如何なるものなるかを自覺してサテハ眞實の佛の慈悲は非常に偉大なるものであつて人間の計るべからざるものであると云ふ事を感じるのである實に御經驗の方は十分に御了解であらうと思ふ、佛はこゝに至らしむる爲に種々の經驗をなさしめて吾人を導き給ふものであると知つて見れば世間の事一として偶然の事はない、美はしい花妙なる動物を見るにつけても意匠論と云ふ如き淺薄な意味とは思へない、吾人は經驗をすればする程佛の慈悲を感じ

てゆくのであるからして人生の總てが悉く佛の導きと感ぜられるのである、この人生觀もこうなれば非常に深き味を有して來る、全體が佛の慈悲佛の力であると解する上に就て從來三身を説く、その一つなる應身と云ふは實に其力の範圍が廣い、先づ大聖釋尊は如何と云ふに全く慈悲を傳へる爲めに此世界に跡を現はされたのである然し之が吾人信仰の對象と言ふのではない吾人の信仰の對象は佛陀の慈悲の塊である即ち佛陀の清淨無限なる力である即ち報身の力であるその力を吾人の心に感ずるのが信仰である、この信仰によりて吾人の達すべき究極の理想は涅槃の清淨なる境で即ち吾人が命終りて始めて到達すべき法身の絶對無限の境界である、ある人はこの法身を以て信仰の對象である様に考へるが、これは吾人の力の及ばぬ妙境の界にして、吾人の最後に到達すべき理想である、佛陀が無限の慈悲無限の力を直接に人々の上に現はして吾人を導き給ふは即ち應身であるこの應身は前に言ふ通り非常に範圍が廣い釋迦如來を始めとして苟も已に法を傳へ己を修養に導く人は皆人生に顯はれたる佛の應化身と云ふべきである、故に信仰の上より見たる人生觀は唯の意匠論に止まらず總てのものが佛の慈悲を知らしむる爲である事か分る、是程趣味のある人生觀は外にはない、茲に至りて人生は活躍するのである、私はこの度の旅行中二三の經驗を得ました、それは何かと云ふと、短かい旅行ではあつたがその間に種々の事情の爲めに始めて計畫が變更されたのである、先づ伊勢に親鸞上人の眞筆があつてそれは私が一度見たいものであると已前から求めて居つた御言葉があるのでは是非見たかつたが

霖雨の氣節と云ふので見られなかつた誠に殘念であつたがそのとき私はかう思つた、今見られないのは殘念であるがしかし私をして猶一層修養を積ましめて然る後それを見せて下さるのに違はないと思つたら左程殘念とも思はなかつた、それからまた私は奈良へ參りて法隆寺に詣りて聖德太子親鸞聖人の昔を忍ぼうと思ふたがこれも汽車の時間の間違のために行く事さへ出来なかつた、此時私は猶深く太子と聖人を味て參詣が出来るに違はないと考へた、このやうな事は鎖些な事であるがこの人生觀の上より見れば大なる味がある、計畫は如何に變らうとも佛陀は吾人をして行く可き所に導き給ふのであると思へば決して愚痴などを出す可きではない、人は他人の罵に對して怒り腹立つは普通ではあるがしかし堪忍すべきである、知つた人は餘程進んだ人である、尙罵に對して佛は今己れの非を知らしめ給ふのである、氣が附いて自ら感謝の念に咽ぶ人は更に一層進んだ尊い人であると思ふ、感謝の念は實に人生觀の根底となるのである、變り易き世に處して何事も佛陀の導きなりと自覺した時は實に奥深き意味を感じるのである、物に満足した時のみが感謝でない苟も内心感謝の念のある人ならばたとひ善事をすることもこれによいあれ満足と云ふやうな小感に安する事はなく常に内心無限の理想にむかつて仰きつゝ進むのである、私もこの度杯は中學時代からの友人が二月にその父を失ひ私は三月父を失ふて同じ境遇なれば同情の念に堪えぬこの友人の處に悔み旁々訪ねた、何れ出逢た上は信仰の話もせうと思ふて出かけた處がこちらでは左程話もせぬうちに向ふては非常に深く感じて呉れて言葉が

出ない様になつた、通常の事がその意味が數倍になつて來るのは全く感謝の心を通ずるからである、一杯の水も言ふ可らざる味となる、友達が深く感じて呉ればその事が一層感謝の念を増してくる事になる實に信仰の上より見ると一舉手一投足が皆意味をなすのである、嘆異鈔の中に人になさげをするに二様あるとして擧げてある即ち淨土の慈悲と聖道の慈悲である聖道の慈悲はものをあはれみかなしみはぐむくとも自分の思ふ様には到底行かぬが淨土の慈悲は念佛していろいろ佛となり大慈大悲をもて我ももふ如く衆生を利益する事が出来るまた今生にて如何に不便いとをしと思ふても十分に満足にたすける事は出来ない而もこの事の慈悲善根は長く續くものでないが淨土の慈悲念佛まうす事ばかりは永劫にわたりて思ふ様に慈悲も善根もする事が出来るとの意味がかいてある、洵に人を救ひ盡すと云ふは佛になつた上の事であつて此世でする位な事は中に人にとどかぬのである、これをこれ迄の考へて見れば頗る不足に感じ死後のみを見る様に考へて居つたがこの頃になつてつくづく限りなき味をこの言葉のうちに見出したのである、人の爲めになる事をすると思ふのは自分はい事が出来ると思ふからである、然るに佛の大慈悲を感じれば決してそうは思はれぬされば何もせぬかと云ふと吾人がする事は感謝の上から見ると些少な事をする迄で、それを慈悲慈善など口に出して云ふは佛陀無限の大慈悲心に對し奉り横着なダイソレた話と云はねばならぬ、如何なる事をするもこれ全く感謝の情に過ぎぬ善をするとかしたとか言へたものではない、吾人は常に佛の大慈に催され感應して益々向上の路を

迎り往くばかりである、佛が高く尊く強く感ぜらるゝと共に吾人の行か愈々不足不充不完全となる、親鸞聖人はその見地に立ちて感謝せらるゝ、聖人は、父母孝養の爲め自分でエライ事が出来ると云ふ様な横着な考から念佛一遍だにとなへたる事はないと言はるゝ、こうであるからこうするそうであるからそうすると云ふやうな勘定ではない一物一物感謝感激せずには居られぬのである、和讃に

如來大悲の恩徳は 身を粉にしても報すべし  
師主知識の恩徳も 骨を挫きても謝すべし

眞に感謝の情よりすると何をしても益々佛に對し奉り申譯がない／＼と不足ではりつめて居る／＼して感謝をしすぎたと云ふ事は毫もないので身を粉にしても大恩に報いたいのである、要するに人生は佛の感謝の念から美化し善化し眞化してゆくのである、法然上人は智慧の權化、太子は慈悲の權化、この靈光の權化により親鸞は引き入れられたとせらるゝ、親鸞聖人が佛の力を感ぜられた時に、彌陀如來の五劫思惟兆載永劫の修行もこの親鸞一人の爲めであると事實愛々たる父母のこゝも思ふて下さると同様に事實の上に感ぜられたのである、又法然上人と共に流罪に處せられ自分は越後の國の邊鄙へやられて居て、自分ばかりの邊鄙へ来て衆生化益か出来るのはこれ偏に法然上人師匠の恩致であると何事も感謝の情よりせられたのである、人生は感謝の念に過ぎたるものはない自ら策勵して往くも味はあるが感謝の念にて進む時は更にそこに一層の味がある、吾人は過去を顧みて毫も愚痴を言はず後悔せず未來に向つて勇進の力を加へさして貰ふのを喜ぶ

第でありますこの暑いのに諸君のかく眞面目に聴いて下さるは佛の慈悲と存じます

同一鹹味

求道の動機

安藤 鐵腸

宗教者必ずしも信仰者でない、余も實にその一人であつた、思ひ回らせば、余が教に入つたは今より三年半の昔、我れ年廿六の一月であつた、その時の事を開陳すれば、或は迷信と笑はれやう、或は薄志弱行と諷られやう、或は不健全なる謬想と斥けられやう、而かも余は今日これを懺悔するに憚らぬのである。

人は稱して後と厄といふ廿六の、正月は中旬、首筋の上部耳の後ろ方に當て一つの腫物を生じた。たしか二十日であつたと覺ゆ、痛さを耐へて淺草の本願寺で開かれた大谷會に出席したが、何となく氣が鬱して、新法主臺下が訝へ／＼として笑ひ興じたまふ御顔もよくは目に入らず、六十の皺顔に厚化粧をして朝鮮國王に謁えし奥村五百子の當時の状態を叙ぶる南條博士の洒落の談話も、紀州熊野の嶮を説て免職坂、胸突峠の由來に及ぶ井上博士の滑稽談も面白く耳にせず、その腫物甚だ場所が悪るい、手遅れしては取り返しがつかぬ、早

く名醫に見てもらひたまへよと友に言はれては、我れなからに怯け氣立ち、さては世にいふ命取りの腫物にては非ずやなど憂ひ煩ひしは愧かしの限りになん、翌朝を待ち詫びて淺草七軒町の樂山堂病院に趣き、院長宇野博士の診斷を乞へば、腫物はさして憂ふべきものならず、十日間も通院せば全瘉せんといふ、一日二日と通ふ内、持病の僂麻室斯、今迄になく激發し、肉を切り骨に沁むるの痛み、療法やら、電氣治療やら、遂にドツド病の床に就く身となつては、平生募りし我慢の角折れて寂寥たる半夜、悄然重き首を垂るることも一再でない、一夜フト十五六年前の記憶を再現して、宛かも自分は現にその運命に左右せられつゝあるかの如く感した、それは外でもない、予の父は三十九歳にして逝き、而かも前夜何等の障りもなく、一家打集て笑ひ戯むれ、殊にその愛を深くした余は父の体に取り纏りて、生長の後の事など語り、快く父と共に臥床に入つたが、明くれば四月八日、近傍の友どちは何れも御釋迦様の誕生とて、甘茶もらひに駆けめぐる中に、余は曉方より突然の胸痛みに苦しみたまふ父上を介抱する身となり、僅か四五時間の内に數言の遺訓を残してみまかられた、しかもその日は父の誕生日であつた、突然に頼の綱を斷たれた余は小供心に人生の悲惨なことを感じ、早世の系統を有する余は到底長命の望がない、祖父は四十六にて没し、父は三十九にて逝く、その血統を受けてその後を襲げる余は恐らく二十六にて此世を終るべしとの感想を起したのである、勿論妄想に違いない、而かし當時余は實にかく信じつゝあつたのである、去る者は日に疎し、人間程解り勝ちな者はない、

その後一年を経、二年を過ぎ、三年四年と累ぬるに従て、漸く世の中に慣れ、心細さを失ひ、遂には前年の感想さへ全く忘るゝに至つた、爾來茲に十有餘年、世塵に紛れ、俗務に逐はれ、心ならずも罪惡の生活を送つたが、有りがたや、み佛我を棄てたまはず、慮らずも大命こゝに降りて、余は濁濁の波浪の中から救ひ上げられた、然れども當時余は未だ道の人ではない、今てこそ佛恩の廣大なるに感泣すれ、その時に於ては只々心細さに堪へられず、煩悶苦惱、夜となく日となく、殆んど火責水責の呵責を受け、如何にせば此の苦惱を遣るを得るかに苦しみ、甚たしきに至ては我正に年廿六此病こそは全く捨命の病に相違ないが、マダ一ヶ月は生さられやう、否半ヶ月は生さられやう、少く積つたところでマダ十日の壽命は保ち得やう、此の間に於て余は此世の名残に何事をか爲さんといふことまで考へたのである。

今日はこちらの岸に咲き、明日は向の岸に咲く萍に比すべきは實に人の心である、さしもに思ひ詰めた自己の運命の、腫物全瘉し、僂麻室斯稍や痛を減するに至ては、漸々に感じを薄くし、遂には本年を以て一期とするといふ感想はいつとはなしに消へ失せた、然れども病は三月の長さに亘り、加ふるに昨秋加賀の政教新聞を退て以來、頓に失意の境遇となり、從來四五ヶ年の間に造りし負債は嵩み／＼三千圓に達し、融通一時に杜絶して、進退窮窮、俗に所謂首の廻らぬ始末となり、債鬼殿しく門に逼りて怒り罵り、母上手に代てその衝に當られたまふを見ては、甚だ快からず、さりとて今日我身の、施すに術なく、病床只管に人生の味氣なきを嘆ずる

のみ、かくて身の病は漸くに癒えたが、癒えぬは心の病である、幸にして廿六歳は必ずしも我が一期ではない、而かも早晚來るべきは死の運命である、人生憂ふべきもの少からずと雖、死に比すれば何の事もない、世に苦患多しと雖、死に比すれば何んを論ずるに足らんや、畢竟死は免るべからずして、而かも日夜に我方に向て進み來る恐るべきのである、然れども死に免るべからず、また免れんとするも詮なし、余は死を免れんとせず、只死を憂ふて止まざるの煩悶を如何にして遣らんか、これ病によつて得し、あと／＼迄残りし教訓であつた。

かくて余はその後二年の餘、死といふことに就て甚だ多くの苦を重ねた、夏の且も冬の夕も、春の花にも秋の月にも、愁然として死を想はざる時はない、燕宴興酣の時卒然死を想ひ、憂愁座に堪えざりしこと幾回ぞ、四六時中死を想ふて枯木冷灰、一脉の生氣なきが如し、酒を被て一時の苦を遣りしこと何遍ぞ、人と語るの時、道を行くの時、書を讀むの時、物を見るの時、一念死に想ひ到て、茫然自失、友に怪しまれしことも屢々であつた、煩悶は煩悶を積み、苦惱は苦惱を重ねた結果、一と思ひに自殺したらばこの苦悶は無くなるであらうと考へたこともあつたが、又全体人が死を憂ふるは畢竟死に就て諦めがつかぬ故である、されば餘儀なき事情の下に十分諦らめて、進んで死に就かば、死に對するの煩悶は自から去るであらう、即ち精神の安慰を死其者に依て充たさんとするのである、この點から見れば合意の情死こそ最も満足のものであらう、義の爲に殉ずるといふ場合の如き亦以て死は

寧ろ節義、名譽の手段として喜んで爲さるゝであらう、若し十年の長病、肉落ち骨立ち、世のあらゆる方面に絶望し病聲徒らに不遇をかこつ身には、死は却て之を待ち設くるの感はなからうか、死の煩悶を遣るの道これに限らぬ、それは人が死を憂ふるは死を自覺するからである、精神を痲痺して自覺力を失はしめ、若しくは自覺力を弱からしめば、死の苦悶は自から除かるゝであらう、腦充血、心臓破裂の如き、死といふ自覺は恐らく起らぬであらう、枯るゝが如き老衰病は縦し自覺はしてもその力は甚だ弱きに相違ない、敵彈に斃るゝ戦死は勿論死の自覺はあらうが、渾身の勇の爲に死その者に就ては殆んど忘るゝが如くであらう、要するに前者は死を飽迄自覺し、諦めに諦めて寧ろ自から死を求めんとし、後者は死の自覺を失ひ若しくは自覺を弱からしめ、無意識に（若しくは他の強き意識に制せられて死といふことには矢張り無意識に）死の關門を通過せんとするのである、かく眞面目に死の場合に就て研究を始め、余は此の二法の中何れを選ばんかと思索したこともあつた、更らに獨身生活は安心の一法である大命將に終らんとして悔懼交々至るの時、最愛の妻が温かき介抱の手は如何に頻死の病み人を慰むるのであらうよ、されどその温き手こそ、今や一刻一刻と冷めたくなりゆく夫の腸をかきむしりつゝあるにはあらざるか、結句冷き衾の袖に妻子眷屬の繫累なく晴々朗々として死にゆくことの幸福には非ざるやなど考ふることも屢々であつた。

達人の眼から見れば血迷た妄想と見えよう、實に余は血迷つたに相違ない、二年餘の日子は全くこの血迷に過ぎ去つた

のである、而かし此の血迷こそ余が一生中にまたと得られぬ経験である、余はこの苦しき悶えたる血迷の爲めに始めて人生の意義を解した、若し余にこの苦しき悶えの血迷がなかりせば、余は畢に一代人生の味を知らざる不幸なる醉生夢死の人となつたかも知れぬのである、而して余はこの二年餘の苦悶時代の終期に於て、始めて暗中一道の光明を認め、今迄は經典祖釋を亂抽してあせりにあせつたが、一も我が心をして満足せしむるものがない、參禪もして見た、講義も聞いて見た、議論もして見た、法談にも耳を傾けたが、一も得るところがない、否得るところはありても安んずるところがない、幸なる哉此の時に至て、始めて自から我心の頼まれぬこと、淺蕪なること、當てにならぬことを自覺し、この自覺が起ると共に自然に阿彌陀如來の光明があり／＼と我身の上を照らしたまふやうに思はれた、勿論阿彌陀如來の本願といふことは今はじめ聞いていたのではないが、それは何か他人事のやうに思はれたが、今は全く我身に引受けて、滿幅の至誠、只阿彌陀如來と一つになるやうな心情になつたのである、この心情が起ると共に今迄の何か心細いやうな、氣弱いやうな心は漸々と無くなりて、心丈夫に事に勇むに至つたは果して安心といふものであらうか、ともかくも二年餘の煩悶一朝にして去り、再び死を思へども死を憂ひざるは余に取て此上なき幸福である、而してそれが求道心の退却でないことを念ずる。

# 人は人也

百目木 劍 虹

人は人なり、人は人以上たることは出来ない。然るに吾等は稍もすれば、人以上たつたとして心にもなき容貌をつくり、堪えかたきを堪え、忍びかたきを忍ばんとするのである。又は何となく高慢の顔して見たい。えらさうに振りまふて見たい。たとへ金がなくとも金持らしくして見たい。學問なくとも物識り顔して見たいのは、凡ての人に通して固有の人情と云ふものであらう。深く内に貯へ、光を包む人は決して人情の俾馬に打ち驅らるゝことはない。よく人口に膾炙する一例を擧げて見やう。それは貝原益軒先生の事である。先生の博學皆人の知る所、而も謙退にして少しも誇る色はない。或時嘗て京師より郷に歸る折、路を海上に取りぬ。同船するもの數名、固より姓名を知る筈がない。偶々一少年ありて意氣傲然、頭を掉ひ、舌を鳴らして滔々として經義を談じられた。先生沈黙謹聽すること字を知らざるもの、如くして居つた。既にして船岸に達し各々姓名里閭を告ぐるに及んで、少年始めて益軒先生たるを知り、赧顔背に汗して遂に姓名を明さずして逃げ去りたと云ふ有名なる話である。先生の如きは所謂光を包み深く内に貯へた人以上の人である。

また益軒先生の辭世の吟に、平生心曲有誰知、常畏天威一欲勿レ欺との句あるが、實際肉親の吾が父と雖、吾が子と雖、自己の心の底を觀破することは出来ない。況して他人は猶更

のことである。心の悪魔の襲ひ来る時、此際此時、肅々として畏れ敬しむより外なしと云はれたのは、流石は益軒先生である。天威を畏るゝ所以のもの、これ乃ち欺かざる所以である。欺かざる所以のものが、天威を畏る所以である。兎角修養の淺き人に限り、内を虚にして外を飾り、自ら欺き他をも欺かむとするのである。かくして人以上たらむとす。誤れるの甚しきものである。

人は人以上たらむと欲するが故に、偽りを語り、飾を好むのである。偽りや飾は金箔の如し、時來れば脱落するを免れぬ。獨り泥中の金は幾年其間に埋れて居るとも、其光りを失ふことはない。吾等は造り花となりて榮えんより、寧ろ野の花たらむことを希ふ、眞摯にして自然の美はそこにあらはるゝのである。人の知ると知らざるとは毫も關する所ではない。花は無心にして天質の美洵に愛すべし。人は邪氣多くして寧ろ厭ふべきである。

人は人以上たらむと欲するが故に、そこに苦悶の芽が開くのである。而して高慢となり、自負となる。零は零也。有限は有限也。無限は遂に無限也。人は飽まで人也。然るに人は人以上たらむことを望む。僅に百斤を擧ぐるに足る力を以て二百斤を動かさんとす。而してこれ不可能の事たるを知らば、人は人以上たらむとの希望もまた不可能である。人は人也との根底揺かざる限り到底人以上たらむとするの念は思ひ止まるべきである。

吾等の執りて動かざる他力教にありては人は人以上たるを欲せず。人は人もとの自覺の基礎に立つを以て、頂點とし極

致とするのである。人は人也、肉の人也。パンを望むべし。衣を欲すべし。名譽を欲すべし。これ自然の要求である。この要求あるが故に邪心も起り、道ならぬ事もするのである。而して外觀も飾りたいのである。親鸞聖人が外に賢善精進の相を現するを得ざれば、内に虚假を懷けばなりと喝破したるもの。たしかに人生の真相にして、千古渝らざる人生觀である。人の目にこそ見えざれば、吾等の心は虚假不實の罪塊を以て充ち満されてをる。若し心中を解剖したならば一見嘔吐を催すであらふ。吾等は一生造惡の凡夫である。何を苦んで人以上たらむことを望むの理あるべきや。又實際望み得られないのである。

勿論佛教には、自身を極めて高く見るか、低くみるか。即ち是心是佛と觀ずるか、底下の凡愚と引き下るかの二方面あるは新しく云ふまでもない。人各々其適する方向に従て進路を取る毫も妨ぐる處なしと雖。佛教に於て此二方面を説くは佛教の淵源の遠くして深く、普ねく群生界を網羅する所以を示すものである。自身を高く見る人は高く見るもよい。自負は亡滅の前驅たり、慢心は陥落の前に來るとは、古人の訓へである。他に安全の航路ある以上は好んで、さかまく怒濤に舟を行るに及ばぬ。自身を高く上ぐる人、多くは虚榮に眩むものである。才智あるもの、なきもの、學識あるもの、なきもの、富者、貧者、貴族、平民、之を現在の吾等が百年後に於て考へて見よ。幾千の細流は期せずして大海にそそぐ、善だの、惡だの、美だの、醜だの、乞食も罪人も皆共に赤裸々として急き墓田に入るではないか。エビクタス曰く、爾

の降る所に渠等も降るにあらざやと。蓋し最後の關門は制裁もなく、規律もなく全く同一鹹味である。若し安全の航路を取るならば自己に就いて考へて見るがよい。何一つ意の欲する所に従ふものはない。一草一木、一紙半錢と雖、吾等の自由となるものはない。人は人也。歡樂ばかりではない、幸福ばかりではない、苦痛も來り、悲哀も襲ふのである。されば吾等は如何にして人生の旅を下るべきか。人は人なるが故に人たらしむるにあるのみ。乃ちよき人の仰せを蒙りて、深く内に貯へ光を包みて進む、これ實に人たらしむる道である。又これより勝れたる安全なる航路はないのである。よき人の仰を蒙るが故に、自ら欺き人を欺くことはない。名譽も財産も唯其命ずるまゝである。ラボック博士曰く『吾等は自ら完全なる能はざるを知る、且つ又我等が心中には確かなる導者あり』と。爾りたしかなる導者あり。過去永々の間流轉し來れる吾等はこの確かなる導者によりて、其身其儘安らかに導かるゝのである。救の手は降るのである。導者は多からざるを要せじ、只一人に限る。卑諺に船頭多くして船山に上ると云ふ。戒むべきである。一意専心、これ道を求むるの要義である。一旦導者と頼みし上は生命も財産も、全く其人の上にある。言を換へて云へば全く其人を信するのである。信するは力なりと云ふ。そこに希望も湧くのである。勇氣も起るのである。乃ち信するは如何なる時に際しても揺かざることである。親鸞聖人が歎異鈔に『詮ずるところ愚身が信心におきてはかくの如し。このうへは念佛をとりて信じたてまつらむとも、またすてんとも面々の御はからひなり』と堅く信じられ

た。一旦心をすゑてきめた上は、餘人は念佛を信ぜうと信ぜまいと少しも關する所でない、他人の信じると信ぜざるによりて愚身の信仰は變るものではない。更に意味を擴充して云へば、念佛は往生の藥にあらざるといはれやうが、又これが爲めに如何なる迫害身に迫り來るとも揺くやうな信じ方ではないとの事である。其信念の強い事嚴上に生えたる老松の如き牢固たるものである。信仰の人は將にかくあるべき等である。一喜一憂に遇ふて所信を狂くるか如きは信じたとは云はれぬ。信ぜざれば止む、苟も信する上は須らく親鸞聖人の見地に立つを要するのである。信の一念にあらはれたる動作は才智も害をなさず、學識も妨げとならず。貧賤も富貴も皆これ打ちて一丸となるのである。才智あればとて佛陀を畏れざると云ふことはない。學識あればとて高慢の顔することはない。哲人曰く、神明を畏るゝことこれ即ち才智なりと、洵に味ふべき教訓である。

要するに人は人なりとの基礎に立つて、始めて佛の道に入ることが出来るのである。而して信仰の泉が湧くのである。低し、高しと云ふもの、其實相對界の現象のみ。位置をかへて見れば高きもの低くして、今迄低きもの高きかも知れぬ。人は人もとの自覺によりて、却て自身を高く引き上げることになるのである。

\* 兼て承り居候御講義の宿縁にて只今當地に参り、風光明耀の靈境にて攝取の佛光に嬉しく浴し奉候。南無阿彌陀佛

# 有絃無絃

無絃生

人生

自然を以て自然を説明すべしとは近世哲學の題句なり。予は又言はんと欲す、人生を以て人生を解釋すべしと。然れども、彼の漫然歲月を送迎しつゝある者に至りては、假令百年の人生を過了たればとて、決して人生の眞意義を悟了せらるべきにあらず。必ず豫じめ、何等かの定見を以て進み、歩々之れが修正改良に注意しつゝあるものにして、始めて到達し得べき境界なるのみ。且夫れ、人生の意義は、之れを悟了したる所には、固より相應の適意あるべきも、本來人生の實驗其者にも亦多大の興味なからざらんや、而も此の如きは、彼の醉生夢死の徒の調興する所にあらず。必ず豫じめ、何等かの理想を懷き、以て日常の行爲を整齋し、以て當面の事象を靈化しつゝ進まんことを努力するものにして、始めて經驗し得べき興味なるのみ。

## 人生と宗教

吾人々類は、肉体の氣車に投乗して、人生を旅行す。而して所謂人道は、是れ鐵路のみ。氣車をして鐵路を走らしむるものは、鐵路其自身にあらずして蒸氣の力なり。今吾人をして克く人道を履行せしむるものは何ぞや、人道其自身なる乎、あらず、宗教の力なり、信仰の力なり。世の宗教を説かずして人道を説く者、及び宗教と人道とを混同するもの、吾れ兩

つながら、其の何の意たるを解する能はざるなり。

## 陰影

暗黒固より陰影なく、光体其自身亦陰影なし。陰影はたゞ暗黒と光体との間に之れ有るのみ。陰影は或る物の、暗黒を出て、光体に向ふ所に於て始めて生じ、漸く光体に近づくに従て、益々擴大し、益々濃厚を加ふ。吾人精神の、肉慾に埋没され、未だ曾て彼岸の光明に眼を向けざるに當りては、吾人は決して自家の罪惡を自覺する能はず。然れども吾人は、吾人の肉慾が、満たざるゝと、満たざるゝとに拘はらず、之れを追求して止まざれば、早晚、之れが吾人に終局の満足と與ふるものにあらずとを悟るに至る。かくて吾人が、聊かたりとも、現實を厭離し初むるの機會は、即ち電光一閃理想の妙境が、髣髴として吾人憧憬の對象となり初むるの機會なり。吾人一度理想の清光を仰ぎ、轉じて吾人自家を回顧し來らば、誰か又自家内界の百鬼跳梁に喫驚せざるものあらんや。此處に至りて罪惡の自覺は、起さざらん欲するも能はざるなり。理想の清光を追ふと、益々急なるに従て、罪惡の陰影益々擴大し、益々濃厚を加へん。松影の暗きは、月の光かな。吾人は彼岸の妙境に達し、理想の光体其自身と一致するに至るまでは、罪惡の陰影、決して吾人を離るゝ能はず、されば吾人に於て罪惡の自覺の、益々明瞭を加へ來るは、寧ろ吾人が、理想の清光に、一步は一步より近づきつゝあることを反證するものにはあらず乎。

## 靜物

一日友人に促がされて、太平洋畫會を一覽せり。予繪畫に

於て何等の知識をも有せず。たゞ性の好むあるのみ。陳列する所、油畫、水彩畫、花鳥山水、人事人物、さては濃淡絳紅多々ある中に、著しく予の注意を引きたるは、某中村氏の「靜物」と題する作品なり。古色掬すべき經卓の上に、半ば服紗より露はれたる簾を載せ、小瓶に一輪の椿花を挿したるを、其の側に置き、此の經卓を右手として其の左側に於て、服紗の上に一個の罽毬を置き、此等の背景に古金鑲の幕を畫けり。此畫の藝術的價值如何は予の關知する所にあらず。然れども予は之れに對して、一種幽遠なる感想に打たれぬ。彼の卓上に閑却されたる玉管は、長へに宇宙人生の根底に横はれる、最古最新の秘曲を奏しつゝあるにあらずや。

## 罪なき人

太平洋畫會にて、今一つ予の注意を惹きたるは、某山崎氏の「罪なき人」なり。齡傾きたる媼の膝の上に、今學校から歸りたらしき八ッ九ッばかりの小童が、無造作にのぼくり上られる所なり。かの媼は祖母なるべく、この小童は孫なるべし。祖母と孫、顔と顔、相見て無念無想の間に微笑を洩らしたる。いかに罪なき人よ、噫、罪なき愛は、罪なき人に於て初めて看取すべし。

## 眞善美

人は美に對する時、最も正直なるものなり。彼れ眞に對し善に對する時、彼の腦裏には、なほ詭辯を弄するの餘裕あり。然れども、美に對するに至りては、觀照一下、全心之れに服す。談話、讀書、人と語るは、天下無用の人と語るより樂しきはなく、書を

讀むは、天下無用の書を讀むより快なるはなし。

## 西行

詩人西行、歌ふて曰はく  
はひつたひ、折らで躑躅を、手にぞとる、さかしき山の  
とりどころには  
ますげ生る、山田に水を、まかすれば、うれしがほにも、  
鳴く蛙かな。  
なかく、に、時々雲のかゝるこそ、月をもてなす、かぎ  
りなりけれ。

## 有而無者

ゲラゲチス、白晝燈を提げて行く。人其の故を問ふ。彼れ答へて曰はく、我れ、人を捜むるなりと。佐藤一齋、言志畫錄に曰はく、有而無者、人也。無而有者、亦人也。

## 清物

冬の世界は嚴なり、春の世界は和なり、夏の世界は清なり、秋の世界は明なり。佐藤一齋、言志畫錄に曰はく、色之清者可觀、聲之清者可聽、水之清者可嗽、風之清者可當、味之清者可嗜、臭之清者可嗅、凡清物皆足以洗吾心と、されば夏は、最も吾人の心を洗ふに適したる季節といふべきなり。

## 蜀を望む

人は常に、何等かの意味に於て満足を追求めしつゝあり。一の満足を得れば、又他の満足を追求めす。然れども吾人は、是れを以て卑むべしとなすの理由を發見する能はず。否、吾人

は常に、是れあるによりて生くるなり。福を得て蜀を望まざる人は、人としての權能を放棄したるものなり。蜀を望む者と、望まざるものとは、福を得たる當時に於ては、差異なきが如しといへども、兩者の將來、何くんぞ同じきを得ん。蜀を望む人は、根ある花なり。蜀を望まざる人は、根なき花なり。若し夫れ吾人、求道の態度に至りては、特に此の點に向て、十分の注意を拂はざる可からざるものあり。

蓮如上人御一代記開書に曰はく

佛法に厭足なければ、法の不思議を聞くといへり。前任上人仰られ候、假令ば世上に吾が好き好むことをば、知りても知りても猶能く知りたう思ふに、人に問ひ幾度も、數奇たることをば、聞ても聞ても能く聞きたく思ふ。佛法のことは幾度聞ても厭かぬことなり。知りても知りても存じたきことなり。法義をば、幾度も幾度も人に問ひ

きはめ申すべきことなるよし仰せられ候。

詩人西行、歌ふて曰はく

待ことは、初音までかと、おもひしに、さゝ古るされぬ、ほゝぎすかな。  
初音をば、さゝいての後は、ほとゝぎす、待つも心の、たのもしき哉。

### 永劫の同朋

住田 智見

我等互に、親子となり、兄弟となり、夫婦となり、朋友となる、尙忽然出來たる無意味の事柄なり、とは思ひすつる能はず。況して未來永劫、同一樂邦の契を結ぶ事、偶然の出來事に非るを感せずんば非ず。釋尊は、開法一千劫同坐五百生、と過去因縁の淺からざる事を説きたまへば、法蓮に列して互に、宗教の眞趣を語り、信仰の有無を打ち明かし、今迄の疑念の晴れ行くこと、恰も閉鎖されたる窓を開きて、颯々たる涼風を容るゝか如く、清快言語の及ぶ所に非ず、此の清蓮、今始めて開かれたるに非ずして、過去久遠の昔より、結ばれたる、如來善巧の大方便に依る芳契也、と知らるゝに至りて、ますゝ其の意義の深遠なるを覺ゆるなり。釋尊も弟子舍利弗等に對し、しばゝ本生の事縁を語りて因縁の深きを説き、今生開法の縁に洩れない、來世再此の法に逢ふ事の難きを知らしめ、吾等の懈怠を懇切に教諭し給ひたり。

然るに求道の士女にして、實感の披瀝たる聖典を拜誦し、或は親切なる先進の教訓に接しなから、尙安心の状態に入る能はず。自ら思ふやう、佛教に宿善の有無と云ふ事あるを聞く、我等は未だ宿善の開發すべき時期に達せざるか故に非るか坏、と遲疑する人あるを見る。釋尊は經に「曾し更に世尊を見たてまつるものは、則ち能く此の事(如來の徳)を信せん、謙敬して聞きて奉行し、踊躍して大きに歡喜せん、憍慢

と弊と懈怠とは、以て此の法を信じかたし、宿世に諸佛を見たてまつれば、樂んて是くの如きの教を聞かん」と説かせられたり。今現に佛教を愛樂する念あり、求道心の盛んに發動する人ならば、必ず過去宿縁の深き人たるを知る可く、失望の淵に沈淪するは、却りて如來の大悲にも値ひかたきと思はざる可らず。「噫、弘誓の強縁は、多生にも値ひかたき、眞實の淨信は、億劫にも獲がたし、たまゝ行信をえは、遠く宿縁を慶べ」と親鸞聖人の慶嘆せられたるも、此の事を申されたるなり。

如來と我等との間に、遠劫の因縁あるのみならず、同一に如來の大悲を喜ぶもの、間、亦曠劫多生、親となり子となり、兄弟となり姉妹となり來たりし契に因り、彼の「ほろく」と啼く山鳥の聲きけは、父かと思ひ母かと思ふ」と古賢の詠せられしも、此の邊の實感たるなり。

「蓮如上人仰せられ候、信をえつれば、先に生るゝ者は兄、後に生るゝ者は弟よ、法敬(願誓)とは兄弟よと仰せられ候、佛恩を一同にうれば、信心一致の上の、四海皆兄弟と云へり」

「同行同侶の目をはらちて、冥慮をとおそれず、唯冥見をとおそるしく存すべきことなり」

苟くも無爲涅槃界の往生を期する大悲光中の御同朋なれば、互に不可思議の宿縁ある者なり。何卒して言行忠信の佛語に順ひ、當相敬愛の遺訓を服膺したきものなり。

### 無題錄

鈴木 卓苗

敵國露西亞に哲人トルストイ翁あることを不可忘は我等の義務なるべし、我等のみならず、世界人類のつとめならむ。何となれば、現代に於て翁の如く偉大なる人果して幾人あるを知らざればなり、二十世紀の世界は、今やその嚮導者として、その頭腦として、その眼として、光りとして、望みとして、この白髮の哲人を有するのみなるを如何せむ、露國を敵とするはその暴政を惡めばなり、我等この爲めの故に翁に敵するの要あらむや、宜しく虚心にしてそのいふ所をきき、我等の斯の如くつとめ、斯の如く苦みつゝ戰をなす所の二十世紀は、「何を爲しつゝありや」をば、以て知得せざるべからざるなり、何か爲めに之を言ふ、請ふ少しく翁について語らむ。

非戰主義者としての翁を知れるものは、並に下の如き奇怪なる言動を諒せざるべからず。  
傳ふる所によれば、翁は平素戰爭を以て罪惡と觀じ、極力之に反抗せるに干らず、日露の戰局展くるや、先づ自著の板權一切を賣却して、之を恤兵部に寄送したりと、又曰く日々老軀を驅りて十里の山路を走らせ、戰報の收受に暇なしと、我等の如き小智を以て推せば、翁の如く言行の矛盾せる者は其類少しと言はむ、されど深く信を翁の腹中に置き虚心に

してその言動の基く所を考へむか、上の如き言行の、必ずしも矛盾せざるのみならず、却てその深刻なる意味に於て、斯くも躍々たる一致の活動をなせるやを了すべし。

翁の非戰主義はその根底を翁が基督教の信念と同一するが如し。これ誠に尊重すべき道理にして、仇を滅するものは仇にあらずして愛なりとのクリストの信念を繼承したるなり、其モーゼの教には、手を以て手を償ひ、耳を以て耳を償ふべしとあるをば、根底より破却し去り、敵若し若の右の頬を打たば、更に左の頬を與へよと教へたる、威嚴あるクリストの信念をば、取りて以て絶對の平和終局の幸福に入るべき道と信じたるなり、我等若し、かの身を皇國に捧げて命を鴻毛の輕きに比する我猛夫の義勇を歎美し、又節を抽んじて一身を良人の犠牲となして悔ひざるのみならず、却て喜色あるわが節婦の徳をあがむることを知るあらば、今翁が抱くる非戰主義の極めて嚴密なる極めて沈痛偉大なる信念によれるあるを諒するに難からじ、韓信跨下の辱を敢て受けたるは、その志を愛重するが故なり、今翁が戰爭を非として、身を捨つるも國家をやぶるも、なほ安んじて之を主張せんとするもの、亦如何に翁が人類の運命を觀し世界の平和幸福の爲めに遠大な志を抱き唯この大志の爲めの故には方處に於けるあらゆる苦患困憊を忍ばむする信念に任ずるかを知るべきなり。

我等の社會にある一派の如き、意地悪るの主義者にあらざして、翁の主義は神の道の爲めの主義なり、故に、一時一處

故高山博士曰へり、我等が偉人を有することの喜びは、以て我等の力の、如何に大に又我等が何等の處まで到達し得べきやを、知り得たるにありと。

同じ人の言へるあり、今の世は夏季講習會の流行する時なり、文運の隆盛は喜ぶべしと雖も、しかれども考一考せよ、今日の如き教育を受くる者が、一年一回たまたま得たるこの夏季長閑の時を再び同じやうに、耳と手との學問をせむが爲めに費すは、愚かならずや、講習會にて習ふほどの事は書物にてわかるなり、書物にても講義にてもわかり兼ねる事あるを忘るゝ勿れ、宜敷自思自修すべしこれ好箇の消夏法なるべしとの意なりき、其これを言へる人逝きてより、二歳ならむとするに、世は益々講習會の隆盛を見る、あゝ學者たるもの、取て以て深く自ら警むるに足らむか。

いつもなれば地方に於てひらかるべき大日本佛教青年會の夏季講習會は、今夏東京の中央に於て催されたり、聞くならく、今後は全然東京の講習會となすべき方針なりと、初めて之を地方景勝の地を下してひらきたるは、遠く俗塵を避けて靜かに甘露の妙法に耳を傾けむとてならむ、しかるに、其唯地方人士の好奇心を動かすにとどまり、中央學生の來り會するものや、乏しきに至り、そのよく來るものと雖も、避暑を主なる目的とし、講習會を餘課とするが如き傾きあり、今や全くその効なかるべきを思ひ、斷乎として之を東京に遷した

の主義にあらずして、万世普通の主義なり、眞に志あるが故に、今日日露の大戦を見ると雖も、以て翁を驚かすに足らざるなり、翁は唯その巨眼を通して、この一場の光景をば「病める者の争ひ」と觀するならむ、しかり病める者なるが故に、藥を與へざるべからず、綱帶を施さざるべからず、しかししてその戦はむと欲する者をしてよく戦しめむとはするなり。翁の語る所を聞に、

我はこの戰爭が、人類の自覺に幾何の貢獻あるかを見るのみと、何をそれ沈痛なる。

それ一基の紀念碑が、その名譽ある將軍の芳烈を永へに語るべき、その土臺には、實に萬骨累々としてうづたかく、鬼哭歇々たるものあるは、蓋し免るべからずとせば翁は實に非戰の自覺が、世界人類の頭腦に下るまでには、そこに幾多の犠牲あらむことは止むべからずとして我等の所謂光榮ある戰爭をば悲觀するなり、翁が板橋を賣却したる一切の收益を恤兵部に致したるが如き。又日々十里の山道に老軀を驅るが如き、嗚呼誰か之を以て「物好き」の事となすか、神の道の爲めに、人道の光榮の爲めに、人類の自覺の爲めに、世界の平和の爲めに、翁の胸中まことに鼎沸するが如きものあらむなり、深く窺めるそのまなこに見よ、長く垂れたるその白鬚に見よ、

我等徒に翁の胸中を摸索すべからず。

トルストイ翁の信念を知らむとせば先づその著「我宗教」を見るべし。

るが如し、宜しきを得たるものか。

今や已に之を選ぜり、其再び都下の熱鬧を避くると稱して、地方に學をうつすが如きことならむを慮り、こゝに二の苦言を呈せむ。

何事にも通ずることなれど、物が自箇の存在を健全にせむと欲せば、自分ならでは出来ぬべきことを選びて死守すべきなり、宗教家ならでは出来ざる、「求法の僧」の輩出したる時代には、その教が光輝昌んなりき、軍人の光榮のうるはしき時は、その振武の一途に熱中して、或は政治家となり或は相場師となるが如きことなき間なるべし、今日青年會ならでは出来得ざる事、而して青年會が最もよく爲し得る事は果して幾何ありや、これ實に、刻下の問題にして又永久の問題なり。之を本年蓮湖辨天社内にひらきたる、講習會につきて言はむ。

講習會が收容し得べき會員は、青年學生なるべし、而してその多くは(むしろ全体)公私専門學校或は大學の學生なり、之れ元より勞しかるべくして、又避くべからざることなり、しかれば青年會の講習會は、高等學校及びその以上の學生の爲めに營むものといふも不可ならむ。

今日學者及び宗教家より、講義に演説に佛教々理につき、聴き得るの機會はあり餘るほどにして決して之が欠乏を感ずる所なし、且つや今日時代の傾向は、煩鎖なる學問信條に害せられて、人心その止住に惑ふの有様見ゆ、しからば今青年會が取るべき、夏季の事業として、講習會の爲すべきことは、他に多かるべきにあらずや、例せば、吾等の空理空文を喜び



て、徳を仰ぎ信念を蔑むの弊を救はむが爲めに、實踐の人を招き、修徳の老僧につきて、眞箇にその安心修得底の消息を叩くこと、可ならむ、又今日の宗教が、その出發點を哲學のそれと全うする如きが爲めに、或は戯論の過を重ね、或は苦悶の淵に沈めるが如きを矯めむが爲めには、各宗の耆宿必ずしも老い去らむや、ついで以てきかば、爲めに造詣する所淺からざるを得む、これ可ならむ、吾を以て見るに、講座を以て講演を張るが如きは、如何に考ふるも現時には、むしろ無用なり、出來得べくんば、一週乃至一句の日子を以てなりとも、所謂宗教家その人と共に、宗教的生活を共にすることを得むことを望みとすべし、この事たるや、實に青年會ならてはよくなし得ざる所にして、又青年會が最もよくなし得べき事たるなり、この點に於て、吾は地方に於てせる講習會を忘れたるなく想ふの情に堪へざるなり。

その折々催せる茶話會と、或は博物館に或は眞鶴監獄に參觀せる、これ等の事は最も適宜の事業なるべし、我等が眼目を忍びて、夢現に佛教の骸骨をさかむよりも、此等の事が、如何に多く我等を宗教的感情に驅るかを知らむ

次に、講習會の講師を撰擇することにつきて考ふるにその何等の標準によりてせるやを了解するに苦むなり、その我等が「徳く爲めに」「習ふ爲めに」「力を得る爲めに」「徳化に浴せむが爲めに」撰はるべき講師ならむ、その何れを尊とし、何れを卑しとすべからざれども、その何れを先とし、何れを後とすべきことはあるべし、しからば青年會は如何に之を取捨せしや。

姉崎博士が三日に亘りてなされたる講話は、吾に向てはまことに一の力なりき。

### 南村閑話

一 記者

●佛足石と云ふものは奈良朝時代より(翁此時圖を示す)あります、足の裏の指には悉く記号の跡が残してある。のみならず足の裏全体には魚や、法螺貝其他色々の痕跡を存して居る。門外漢より見れば、奇異の思ひをなすであらう。佛足石の事に就て經文を調べたなら定めし面白き由來があらうと思はる。

●人は師なくては逆も偉大なる人格を鍛ひ上げることが難い。むかし釋尊の高弟といはれた阿難尊者と雖、もう少しのことと誘惑に遇ふて墮落する處であつた。これは首楞嚴經に委しく出であるが、始め阿難尊者が威儀を嚴整し、恭しく食を乞ひつゝ、嬌室を經歷したが、大幻術の摩登伽女の爲め呪文を以て引き寄せられ、嬌躬撫摩將に戒體を毀たむとすのである。戒律堅固な阿難尊者も忽ち煩惱の火が燃えかゝつたのである。それを釋尊ちやんと知りて阿難を救ふたばかりでなく、嬌女の摩登伽女まで濟度されてしまつた。その時の阿難の状態はどうであるかと云ふに、頂禮悲泣して道力の全からざるを悔ひ恨みたのである。定めし男泣に泣いた事であらう。

是を以て見ても師の大切なる所以は明瞭である。

●釋尊は韋提希夫人に法を説き玉ひて後、空を飛んで靈鷲山に歸へられたとある。これなども今の人には信ぜられまい。そこが神通力のある所じや。

●私の師に昧巖和尚と云ふ人がありました。なか／＼えらい和尚であつた。容貌も偉大眼光も炯々として鋭いが、併しどことなくやさしい處があつた。私の受けた感化は随分多いやうだ。

●もと此和尚は伊豫宇和島の人で、後年藩公の菩提寺に住職せられた位の和尚であるから、幼時の逸話が多い。七八歳の腕白盛の時、夏の炎天にさらされつゝ、田畔のあなたこなたを駆け廻りてとんぼ狩をして十數疋をばて得々して家に歸へつた。處が、母之をみて、無益の殺生すべからずと深く戒めた、時に和尚答ふらく、此のとんぼは徒に地上の草に止まり翼を上下して樂み、敢て飛ぶを欲せず、なまけものなれば懲らしめの爲め持ち歸りしなりと。以て幼よりすでに凡庸の器にあらざるを知るに足る。

●長じて學成り、藩公の菩提寺に住職となる。一日大守に謁す。庭に竹あり。和尚、主公に名を問ふ、主公知らずと云ふ。和尚曰く、これは大明竹(大名に通)と云ふものである。何の役に立たぬものなれども、かく庭に植置けば雅致のあるものである。大名も亦此通りて座敷の床飾には適するが、人としての能力なきものであると。主公たゞ苦笑するのみ、豪放概ね此類であつた。

●又或時藩の家臣來りて、此度執行の法要は經費節減の爲

め從來十萬石に過ぎたる法要をつとめたゆゑ、此度は中庸を執りて營みたとしと申入れしに。和尚いつかな聞入れず、そはいはれなき事柄である。此和尚に相談もせず、勝手氣儘に取り計ふとは、何十年來一藩の祖先を祭り來りし習慣を打ち破るものにして、祖先の靈に對して申譯ない。依て藩中の面々列坐の上主公に謁して余か微衷のある所を披瀝しやうとて、固く執りて動かない。家臣止むなく事實を主公に言上す。依て再會議を開くことになつた。和尚其時の言に中庸とは忠實にして誠を盡すこととて、へらす根性ではない。十萬石に過ぎたる法要を營むとも至誠なくては祖先の靈に對して何の效にならない。至誠を以て靈を祭るならば冗費を省くとも何等の疚しい處はない。へらす根性一方で、至誠を欠く法要を營むならば和尚は今より直に退隱をせむと申出たが。藩公其言に感じ凡て和尚の計ひに一任したとの事である。

●後年故ありて私の處に居住せられたが。自ら手を下して火を吹き且つ座敷まで清められた。私の小僧の手紙の中に、和尚様只今火を吹き申候といかてあつたが、これが當時の状態である。非凡の器を有する人は其志を得ざることもありても泰然として餘裕あるものである。昧巖和尚の如き亦此の如きである。魚千里と云ふ語あるが、池中の魚が小瓶に移されても尚悠々として其生を樂むやうなものである。

●書家三洲曾て木戸公を訪ひし時、壁間に公が自筆の書一幅をかゝく。雲烟飛動、公か平生の筆にまさる數等。三洲熟視して曰く、これ公の筆にあらず恐く偽筆ならむと。公笑て曰く、爾り々々偽筆なれども頗る名筆なるを以て購ひしなり

と、此話に徴しても偽筆なりと一概に排斥すべきものではない。偽筆を試むる位の人には必ず名筆にあらざれば爲し能はざればである。

◎鴻雪爪も死んだが、新聞では大層ほめてある。外の事は知らぬが、禪僧が一轉して神官となり。そして肉食妻帯勝手たるべしと、勝手の變言を吐いた人である。私は大嫌ぢや。

### 海外事情

爾來清容如何、花晨月夕幸に稱名の安からむことを祈る。弟無事、十地經の校訂漸くする。今は秘密部の經典を對譯中なり。倍別封獨逸佛傳道會の規則宣言書、御序の節「求道」に譯載願度候。同會は中々有望の會にて、從前出てし小冊子類も中々多く見るに足るべきもの少なからず、其中二三種送致可致、暇さへあれば吾等も隨分全會の任事出來可申、弟は常に會の二三の人と文通改候。黒田師の大乗佛敎の獨譯新刊の佛敎の光の獨譯も出來候。

獨逸ストラスブルグにて

渡邊海旭

### 獨逸佛敎徒に告ぐ

兄弟姉妹!

我等の尊き師主、四海の贊嘆せる佛陀はその弟子に命じ玉ふに崇高なる解脱の敎を世界の民人に告知すべきを以てし玉へ

協會は其の目的を達する爲め左の準備及び手段を講ず、講演の開設、適當なる冊子の發行、支部の設立、佛敎學院、書庫及び閱覽所の設置、獨逸に住する佛敎徒の統一、東洋佛敎團體との交通、佛敎會議の招集即是なり、協會は既業に亞細亞に於ける佛敎團體と聯絡を通じたり。

傳道をして更に有力ならしめん爲め、月刊雜誌「佛敎徒」

(獨逸佛敎傳道協會機關)の發行準備中なり。

兄弟姉妹! 解脱の敎が獨逸國に於ても亦告知さるべき時は來りぬ、佛敎の傳道が熱誠を以てその慈悲の作業に掛るべき機は熟しぬ、働かずべし、作爲すべし、合力すべし、實にや收穫は大なり而も勞多し、使命は壯なり而も开を佛敎の眞精神に從て實行するは難事なり。

我等の主の呼聲は西方諸邦、殊にまた我が獨逸國中に響き渡れり。

兄弟姉妹! 共助せよ、敎を弘むる尊き仕事に、團結せよ、我等の大なる希望の實現の爲め、我等の光榮ある宗教の護持の爲め

### 獨逸佛敎傳道協會管事

再告

獨逸佛敎傳道會事務所は Leipzig, Markt 91 にあり、同所は諸般の問合せに對し快く解答の勞を採るべく望に依り會則、入會證、及び無代價印刷物を送附すべし、また雜誌補助の寄附は同所に宛てられんことを望む。(規則は次號に)

り。此の命に遵ひて佛陀の使徒は東方の諸邦に説法して今日釋迦牟尼の説き玉へる宗教を眞理とし認むるもの五億を以て數ふるに至りぬ。

然るに西洋の諸國に在て佛敎及びその開祖に注意するに至りたる猶最近のことに屬す。西方の民人に我等の光榮ある宗教に對する贊嘆崇敬の念を起さしめんことを目的とせる好個の著作は歐米に顯はれたり。地は軟らげられたり。氷は溶け初めたり! いざ傳道の仕事にかゝれ! 兄弟姉妹、起て大教主の命に從へ!

獨逸諸邦に於ける佛敎の傳道を編成し、統一し、總て我等の宗教の原義と一致する獎進を計らんが爲め、近く「獨逸佛敎傳道協會」(本部ライプツヒ)は組織されたり。本會は忍容と仁愛の地盤の上に立つものにして毫も西洋に於ける現存の基督敎の諸團體に對する攻撃を以て事とするものにあらず、その期する所は佛敎の傳播と我國に於て佛敎の團體を設立するに在り

佛敎は  
無知及び精神の抑壓より離脱せしむる宗教なり  
固定の教條を有せざる解説の宗教なり  
精神の拘束なき眞實且つ自由なる人性の宗教なり  
盲信なき開悟の宗教なり  
恣意なき正義の宗教なり

佛敎傳道協會はその會員に對し、その從來の宗旨より脱退することをも、また何等の信條の承認をも要望することなし。自定及び自由は佛敎の二大要義なり。

### 風尚餘韻

句

佛

旅程越路に入る

桐の花咲き盡す頃の油照り

來迎寺は巴の舊蹟遺物あり

鐵扇に残る烈女が骨の跡

海岸

夏の日を網干に群る、鴉かな

越中の街道鬼舞鬼伏等の名あり三句

鬼伏せや繡吹る、青嵐

曉の雷雨晴れ行く浪がしら

苔の花黄に咲く越の藁屋かな

佐渡

若竹に檀風城の舊趾かな

麥秋や佐渡に狐の祟りなき

鑛脈の元山割けて雲の峰

順徳帝御陵附近

稗つくや眞野の山里閑古鳥

阿佛、千日尼の舊跡

千日が髪おろす日や風薫る

甲辰三月觀兵丁出征而作

前田 含潤

妻送夫兮兒別親。驛亭朝雨澁輕塵。傍觀我亦鷹將斷。他日春閨夢裡人。

暮春過野禰

不覺清明過幾旬。出門紅紫已爲塵。新鴈啼度祠林綠。一樹殘花還可人。

岡山後樂園

巖花遶草夏光斑。露榻人凭忽霽間。仙鶴和風一聲遠。飛雲流翠夕陽山。

雜咏

(瀛車の中にて)

麻 郷 生

麥枯れて飛ぶこと低し親ひばり  
懶げな美人の眉や瀛車の蠅  
トンネルを潜るも知らず晝寝かな  
卯の花に瀛車の烟や野の小家  
梅雨晴や白色の顔皆暑し  
炎天やポエントマンの冬帽子  
河骨に土船も朽ちて藪の傍  
利根を渡りて  
炎天や淺瀬つゝきに川蒸氣  
畦に臥す犬あはれむや田草取

菊池 曉 汀(寄)

ひんがしの空にあかねの色さして敵の堡塞に日の旗のぼる  
地圖ひらく我手やせたり太刀とりてしこの醜草たつによしなき  
追はれ來て息ふ百合園消え失せて荊棘、薊の闊路となりぬ。

小 鼠

同 人

夕べの鐘の八つを告げて  
諸人眠りて四隣寂寥。  
身はこれ詩人興に入りて  
力ある句に筆をかむ。  
古粟を出てし小鼠の  
我交机にうづくまり。  
かすかに吟する詩のふしに  
さながら神に入る如し。  
「愉快か興ある色も見えて」  
息も静かに委靡に。  
無心に入るか小鼠よ  
詩のふしやめは尾をふりて。  
酔ひし如きのまなざしに  
快樂あふるる色見せて。  
歩みも遅々と文庫の  
かなたに入りに音もなし。

新刊紹介

●死の問題

死の問題、これ好箇の活問題也。蓋し何人も避くべからざるは死の關門也。人、生あり、老あり、病あり、而して死は最後の斷案也。本書死の問題はこの最後の斷案に向て解決を試みんとしたるもの、説き得て遺憾なしと云ふ能はざるも、少なくとも著者が死の問題に向て如何なる觀念を有するかなを知るに足る。著者の序に曰く。

題して死の問題と云ふと雖、全編悉く死の問題を論ずるにあらず。偶死の問題を記する多かりしため、靈感集に名くるに死の問題を以てせしのみ。故に本書に適當なる名を求むれば、諱觀錄、沈思錄、靈感集など、然りしならんかと思はる。

と、以て本書の内容を知るを得べし。文の流麗句の暢達せる、著者獨得の技と云ふべし。(定價二十錢、木郷、文明堂)

●生 死 自 在

西蔵探險を以て名高き河口氏の著書也。通俗的佛教の意義を説明し、所有佛教に關する問題を提けて解決を下したるもの、題して生死自在と云ふ。當らざるが如し。されど佛教の離問題に向て平易に筆をほししたるは、本書の特色なりと云ふべきか。(定價二十錢、東京、博文館)

●佛 教 通 觀

本書は上下二巻より成り、俱舍、成實、法相、三論、天台、華嚴、眞實、禪、日蓮、淨土等の諸宗に對して、其宗旨を明にし、其特色を發揮し、且つ著者の批評を加えて讀者をして佛教の廣海に導いて其航路を失はざらしむるにいたらしむ。著者の用意周到なりと云ふべし。通俗佛教として其意義の闡明せられたる本書の右に出るものなかるべしと信ず。(定價二十五錢、木郷、文明堂)

●佛 教 通 觀

明治お伽噺第十編の上巻として出でたる。冒險的少年がお伽丸に搭して先づ朝鮮に航して虎を征伐し、次で支那、印度、西洋等にわたり、ゆきゆきて、獅子、狼を征服したる、興味あるお伽話也。下巻は大陸の物語ならむが、少年諸君は待ち遠がるべし。(一冊十二錢、東京博文館)

●少年日露戰史

日露戰爭は古今未曾有の事變也。而して我國は今や海に陸に連戦連勝、國威の

曉 鳥 敏 著

河口 慧海 著

井上 闕了 著

巖谷 小波 作

巖谷 小波 編

發掘此時にあり。國民たるもの將に大に注目せざるべからず。而して少年の爲め殊に恰好の讀みものなきは甚だ遺憾とせざるべからず、これ著者の此著ある所以也。著者乃ち曰く、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戰爭をかいた本であります。一言にて本書の内容を盡くせりと云ふべし。本書は第一編開戦の巻也。開戦の原因、を始めて第十二章日進、春日の到着までを記載せられたり。以下編を逐つて勇將猛卒の戦功は録せらるるならむ。文は言文一致にして誠に老練の也。活きたる教科書として吾人は本書を迎ふるもの也。(定價拾二錢、東京、博文館)

●ふたご草紙

世界お伽噺第五十八編として出づ。羅馬尼亞の物語なり。短篇なれども變化の多きたりそれだけ興味を感ずること深きやに覺ゆ。(一冊八錢、東京、博文館)

政教時報

○日曜講話

●六月五日(第二十回) 曉鳥氏は清澤先生の道徳談をなされた。曰く先生が常に親しく語られるには第一忠孝兩絶、第二國家滅亡、第三國財を思はざる、と第四父子を見ざる事等にして、常に釋尊の實例を挙げ來りて、短刀直入、人生の眞意義を述べられたるの餘、今尙彷彿として目前にあるを覺ふる事など、尙種々の物語をせられたり。次に近角氏は釋生論と涅槃論に就て述べられたり、吾々の此の人生に生れたるは偶然の事にあらず、吾々の前生は如何なりしや、轉々生々迷ひ來る也。然るに今佛陀に擲取せられたる時こそ涅槃大覺の樂境に至らしむるものなるを述べられたり。これ等の思想は本書を參考とせられたし。

●六月十二日(第二十一回) 精龍造は白隱禪師の歌に付て所感を述べられたり、歌の適切なるを鈔録すれば左の如し。

衆生近きを知らずして、遠く求むる思かさま。  
たとへば水の中に居て渴をさけぶが如くなり。  
長者の家の子となりて貧里に迷ふに異ならず。  
六塵輪廻の因縁は己が愚痴の略路なり。

時路に暗路をふみそへていつか生死を離るべき。右の教訓の句によりて禪師の眞意を解するを得べし。次に近角氏は信仰と理想に就て、諒々として熱心に説かれたり。要點は前號の社説に詳かなり、次を一讀を乞ふ。

◎六月十九日(第二十二回) 前田憲徳氏は信仰は理窟や學問で得らるゝものにあらずるを述べ、最後に信と行とは二者不離の關係にあるを説かれたり。大要は次號に掲ぐる筈也。次に楠龍造氏はエヒクテタスの教訓を讀むとて「されど我れに錢なし、何處より麵包を得べきか」との一節を引きエヒクテタスの本領を説破せられたり。

◎六月二十六日(第二十三回) 曾我量深氏は木日の好晴の事よりして、春は臈にあり、秋は月にあり、冬は氷にあり、而して夏は清冽の處にありとて氣候上の談話を試みられたり、近角常親氏は家庭的宗教として、追々暑中休暇となるにつき、諸君は故園に歸へらるならむ、就ては家庭上に於て宗教の生活を加えられたしとて、頼山陽と香樹院との問答を語り、後年山陽が母を奉じて嵐山に遊ぶとか、吉野に遊ぶとの詩に徴してよく孝養を盡されしことの例を挙げられたり。而して親鸞聖人は家庭的宗教を始められ、信仰を異にせば例へ自身の子なりとも容赦なく排斥せられたる所以を語られたり。これにて明治三十七年前半に於て求道學會の講話も如來の加備力に依りて、善なく説經を了へたり、而して九月より更に秋風都門に入るを待ちて講話を開始せむ。終りに臨みて來聽者諸君の求道の熱誠を深く謝すると共に諸君の健康を祈らむ哉。

◎談話會(第五回) 廿六日講話後引き続き例月の通り催された。近角氏は諸君は暑中休暇と共に歸郷せらるゝを以て、夏期の修養として、修養に關する書籍を撰んで、日に多讀を要せしむ、可成課業として讀まれたる旨趣を語り、それに就て先づ朝早く起きて運動後食前に佛前に拜し終りて嘆息を絶せしむ、又は教行信證延書を讀誦せられたるを述べて閉會を告げたり、出席者五十餘名なりき。今日は久々にて空は晴れ、如何にも夏の清らかなる模様を見るを得たり。

### ○第一求道會

○六月四日 第廿五回 講題 信心は佛性也

### 編輯餘録

◎本派出身の青年にして、現に東京帝國大學に在學せる學生諸氏は、一派教學上の執政に對して憚焉たらざる所有之、頃日意見書を草して親しく法主に建白せられ候由。教界の活動偏に青年の双手を待つ今日、幸に諸君の自重を祈る。

◎巴里發刊の某誌上に於て身体を發達せしむる方法を掲げ候。其中に如何なる場合にも酒類を嚴禁せざるべからず、酒類ほど人体の發育を妨ぐるものなしとの事に候。酒類は人体の發育を害するのみならず、凡ての場合に於て好果を來すものならざることは、今更ことごとくしく云ふ程の必要もあらじと存候。

◎細民の生計の困難なるは敢て今日に始まりたるにあらざるも、時局の影響亦少なしとせざるべし。近頃内務省が市内中にも最も貧民窟と稱せらるる四谷、下谷、淺草等に就き取調たる状況をきくに、先づ細民の唯一の金融機關は質屋にあるを以て質屋に就て調査したるに、質屋の繁昌は不景氣の時にあらずして、上景氣の時でありとは奇異の事なるも、蓋し不景氣の時はず質入の物品の盡きざるが爲めなりとの事に候。之を昨年十月に比較するに四割乃至五割の減少なりと云ふ。以て細民困窮の状態を推知すべき也。

◎街鐵の三錢均一は破れて五錢の切符をつくらむとす。上等客車聯結の理由の下に。

◎梅雨漸く晴れ來りて俄に炎熱を増し、瓶中に坐するの思有之候。されど夕涼の快は夏の賜に候。

近角常親氏

◎大意 和讃に信心よる、ぶろのひとを、如來とひとしときたまふ、大信心は佛性也。佛性すなほち如來也。其信するとは佛性也、如來也。こゝに所謂佛性とは哲學上に於ける本體にもあらず、實在にもあらず、煩惱の黒雲はれわたりて而して法性の覺月あらはるゝ也。故に吾々は死後に至りて始めて眞如法性の妙境を味ひ得るものなることを懇々説かれたり。聽者三十餘名なりき。

○六月十一日 講題 宗教最高の理想

近角常親氏出席

◎大意 宗教の最高の理想とする處は内心の解脱にあり、佛敎に於て涅槃の妙果と稱するは即ちこの境をいふ。涅槃には二意あり、これを釋尊に就いていへば、釋尊遂に苦行の益なきを知り給ひてより菩提樹の下に端座せらるゝ事七日にして眼月八日明明煌々たるの時覺然成道大悟し給ひしは正には是れ有餘涅槃にして内心の繫縛は脱せられしと雖も未だ肉体的縛あり故に有餘といふ。第二は釋尊が菩提河の邊りに於て往生によりて談せられたる涅槃にしてこれは無餘涅槃といふ、茲に最高の理想といふは、これを指すものなり。心身の繫縛此に至りて全く脱離するを得て眞に自由の境界なり。こゝは釋尊についていふものなるも吾人が信仰の最高の理想も之に外ならず、然れどもこれ理想にして理想は到底吾人の得て掴むべきものに非ざれば假令信仰を得るとも直ちに並に至るに非ざる事を知るべきなり、故に吾人が信仰の對象とするものは應身の釋尊を通して報身の阿彌陀如來を信するにあり、而して法身の理佛及び極樂の境界は是理想なり、こゝ吾人が理想に往生して所謂無餘涅槃に入るに非れば談すべからざるものなり、こゝ吾人が理想といふ所以なり。

○六月十八日 休講

○六月廿五日 第二十七回 講題 感謝の念

近角常親氏

これは本號の講話欄に掲げおきぬ。

○七月二日 第二十八回 講題 夏季修養

近角常親氏

趣意は載せて本號の社説にあり。乞一讀焉

◎郷里岩手縣にありて久しく肺をやみつゝありし永井瀧江君はこたび逝去せられ候。可悼哉。

◎前號の誌上にて、求道學會紀念として毒を植付しことを記載致候が、無窮堂主人より左の書に接し申候。

求道學會の園内へ植へたる毒は何といふ種なりや、小生も本年園内へ「Molera モーレル種」といふ毒をタツタ一株、移植致候。僅に一株故十年タツテも連も主人の腹を充すに足るまじと存す候。是は小兒誕生の紀念に候。小兒が學校へ通ふ頃には定て小兒の慰みとならんと、是が所謂老翁心に有之候。其外密柑一株植ふ候。是は枯れかゝり居候得共、どうかこゝに花を開き三箇結果致候様子に候。成熟の上は、一個は求道學會へ送るべきか。呵々々。毒も植ふたり、密柑も植ふたり、此上は何か珍しき花にても作り、佛に捧げまつらんか。

我口を肥し、我目を樂ましむることばかりいつも先んぜらるゝは、よくくおろかなるものにあらずや。

◎佐賀縣の鎮西佛敎團にては八月一日より一週間前田、村上兩博士を聘し講習會をひらく由。

◎仙臺にて本月下旬より八月にわたりにて、佛敎講話會をひらき、東京より大内居士其他の諸氏のぞまると由。

◎近角氏は八月初旬より中旬まで岩手縣大澤温泉夏季講話會に出席の筈に候。こゝは盛岡市をさる南方十里の山地にして、遠く塵寰を脱し所謂桃源洞裏にあり。從來この種のさゝやかなる會をいとなみ來りたる由に候。尙仙臺よりは文學士三好愛吉氏のぞまると、筈に候。學舎の波岡茂輝、鈴木卓苗君等幹旋すべく候。

◎近角氏は岩手縣の講習會を了へたる後、更に長野縣飯山附近にて八月十九日より一週間、同地の夏季修養會に臨まる。

べく候。  
 ● 學舎の諸君はそれ／＼楽しき故山に歸られ、俄に寂寥を感じ候。  
 ● 學舎の藤井專隨君はこの度文科大學哲學科を卒業せられた候。  
 ● 近角氏は本月廿四日より三日間關西佛教青年會の講習會にも出席可致候。

● 求道學舎の日曜講話は六月限りにて休講。更に九月第二日曜日より開會し、求道の人々と益々向上の道に進み度存候。  
 ● 九段の第二求道會は七月二日にてこれも休講し、九月第二十曜より開會の筈に候。

● 求道學舎より歎異鈔を出版致候が、殘部有之候に付、左の定價にて頒つべく候。  
 ▲ 一冊三錢、百冊以上一冊に付二錢五厘宛、郵税三冊まで二錢の事▼

- 待ち遠きものは旅順の陥落に候。
- 時下氣候不順、偏に諸氏の健在を祈候。
- 本誌發行意外に遅延いたし深く諸君に謝する所也。

第十 佛敎講習會雜觀

〔大日本佛敎青年會〕

● 大日本佛敎青年會が第十三回の講習會をひらくに當り、從來の慣例を打破して東京に催したのは、青年會の歴史中一異彩を放つものである。更に講習會を改めて修養會としたら

むには、最も意義の深いものとなつたであらふ。

● 一週間や、十日間で、歴史や、地理のやうな講習でも、効果を收むること出来ざるは分りきつた事である。況や廣漠たる佛敎の經典を講習した處で、恐くは何物も腦裡に印象を興ふるものはなからふ。講習會は全然修養のためにならぬとは云はぬが、聽講者の考へは始めから佛敎研究の積りて來る虞があるゆゑ。この點より見れば修養會と名くるにこした事はない。

● 修養會と名けた處で、一週間や十日で以て目に見ゆる程の効果あるものでない。修養と云ふ事は吾々が一生涯永い間忘るべからざる問題である。一日と雖、半日と雖、修養と云ふ事は必要となつて來る。講習會に代ふるに修養會と名けた處で其内容に於て多くのけじめある譯でないけれども、只聽者の爲め多少注意を起さしむる事は出來ると思はる。又講師の方に於ても、理論や、考證やあまり架空的の講話は多少遠慮するであらふ。

● かく云へばとて今年の講習會は無功德であると云ふ譯ではない。從來の地方のお祭騒に比して多大の効果を收めた事と信ぜらる。  
 ● 會場の狹隘は幾多の不便を興へたが、場所が場所がらであるから、それを償ふに餘りがある。  
 ● 不忍池畔と云へば誰も遠を想ひ、辨財天を想はぬものはない。而して會場は其名高き辨財天の祠畔を撰んだのである。

● 會期は梅雨漸く晴を告げ、將に炎熱來らむとする、七月三日より十日間であつた。池の水面は今や青錢を布いた如く

蓮の葉が尺餘も首を伸はして、さら／＼と日光を受けてある。蕾はすでに拳の如く、排置正しくあらはれて透き徹ふるやうな紅いろは笑を破らうとしてゐる。上野の森はこんもりとして緑の葉は目を遮り、僅に鐘樓の一角をあらはして吾等を招くやうである。風は池の面を渡りて法筵に列なり、鐘は靜かなる森を破りて吾等の眠を呼び覺すのである。此處に會して法縁をむすぶ、決して偶然ではない。參聽者一百二十人、若き婦人の聽講するもの五人。

● 講師は佛敎界知名の士。曰く、大内青巒、姉崎正治、近角常觀、石川成章、松本文三郎、加藤玄智、村上專精、前田慧雲、和田鼎、荻野仲三郎、忽滑谷快天、黒田春洞、境野哲、島地默雷の諸氏。講師すでに多し、一日四時間の講筵止むを得ざるも、夏の日としては多きに過く、これ考ふべからずや。  
 ● 從來に比して新進の講師を選むだのは、何となく頼母しき心地がした。されどもう一步進んで講師の選定に注意して貰ひたいかつた。これ或は無理の注文かも知れぬ。

● 開會中茶話會は三たび開かれた、出席者も多く皆眞面目で誠に有益であつた、是等の事は形式に流れ易いから大に注意を拂はねばならぬ。自身の信仰の告白は遠慮なく打ち明くるがよい。併し講師の講話に就て質問するのも亦必要の事である。屹度疑問を抱いてゐる人があるに違ひない。

● 開會中、茶話會に次ぐに一日は博物館を參觀し、一日は眞鳴監獄を參觀せられた。就中監獄參觀の如き、社會の活現象は縮寫せられて歴々目にうつるのである。生きた教訓とはこれ等の事をさすのである。惜い事には茶話會の席に於て

是等所感を述べた人のない事である。ボートや、遠足などより、たしかに成効の一つである。

● 七月三日は開會式の當日であつた。式も至りて簡單で、泉幹事の開會の辭終ると共に、大内居士開講の祝辭を述べられ。次て姉崎博士の講演、再び大内居士の講演あり。午後茶話會と云ふ順序であつた。

● 姉崎博士の講演はたしかに聞くべき價があつた。勿論新の説ではない、只之を云ひあらはすに、新しき形式を以て説かれたのである。それが姉崎博士の手際である。辯は先づ流暢ではない、併し、どことなく力強き感動を興ふるやうである。藪の絲を吐くが如く、盡さんとて盡さず、斷えんとして斷えず。聽く人をして名残りおしいやうな感を持たせるやうである。其辯は流暢ではないが、清らかである。例へば月の澄み渡りたやうである。其説は嶄新ではないが、詩的である。譬へば山の彩れるやうである。詩的なるが故に同じ事を繰り返へされても飽かぬである。清らかなるゆゑに感に打たれ易い。姉崎博士の文に對しても亦此感がある。

● 姉崎博士は劈頭に於て余は佛敎徒たると共に耶蘇徒たるものである。耶蘇徒たるが故に佛敎徒たりと云はれたやうであつた。博士の信仰は二つあるやうに、多くの人に其意味を誤解せられたではなからふか。

● 松本博士は支那の程明道の定性書と李習之の復性書とを辯ぜられた。至極ジミな講本の選び方である。ソシテ至極眞面目な飾り氣のなき、價打のある講義であつた。たしかに手答へのする處を認むだ味は、確かな覺えのある人の胸にはよ

く反響した。

●惜いことには聴講者の多くの人に此が分かつたかドローだか。其點はタシカに姉崎博士の十人分かりのするのとは正反對である。姉崎博士の御料理の上手な所が御手際だか。松本博士は料理も修飾もせぬ所が味ふべき點である。

●博士と云へば珍らしきことを言ふもの、様に考へられて居る、随分古い連中が、新思想を持ちて居るかの如く、ハイカラをさめこむ世の中に、純正哲學の粹を極め、新らしき方法で佛敎を研究した同博士の口より、三日間少しも外國語もさかず、且つ講本は支那の儒者の書きたもので、其精神は臨濟の衣鉢を傳つて居つた。しかし少しも臨濟くさくなかつたと云ふことは如何にも其人格が奥ゆかしい。

●慾を云へば博士の修養の實驗談をさ、たい人が多かつた。博士は病を推して三日間も出席せられたのは大に感謝すべき次第である。

●大内居士の講本は承陽大師の普勸坐禪儀の一節であつた。居士曰く、大運動するならば、大靜止を要す。これ坐禪の要義なりと居士の講演はこの一語にて盡きてある。他は蛇足のみ。

●姉崎博士は講本をつくらずして、直に所感を披瀝せられた爲めに、字義に泥むことなくして、興味深かく感ぜられた。博士は先づ初めに信仰に就て述べられ、次に自身の信仰、最後に佛陀と基督との根本的敎義を演べられた。之を概括して云へば信仰論とも云ふべきである。

●信仰とは佛の人となりを信するのである。信仰とは事實

氏の談、また奇警の觀察である。

●近角講師曰く。信仰とは内心に於けるレボリユーションなりと。一言にして信仰の内容を盡くしたものである。

●近角講師の講本は嘆異鈔にして、前田博士の講本は敎行信證の大意であつた。兩者期せずして親鸞聖人の精神を發揮せられたはうれしかつた。

●境野講師は日本佛敎史であつた。乾燥無味なる歴史を一時間や二時間の内に明晰に而も趣味ふかく達意的に述べられたるやうである。記者は欠席の爲めさくことが出来なかつた。

●加藤講師はスピノザの信仰と蘇東坡の文に就て、自身の信仰の徑路を述べられた。理論を離れた宗教談で面白く感じた。

●合理的宗教を語るべき加藤氏、新佛敎を唱ふべき境野氏、神秘を説くべき姉崎氏却て一言も之に及ばなかつたは意想外であつた。

●最も姉崎博士は藝術と宗教とを説かれた、かゝる意味に於ての神秘ならば吾等の思想と矛盾せざるのみか、殆ど相接近するのである。眞理は永遠に存在することは誰もうなづく處。藝術家か其作物に對して自ら恍惚として神來の巧妙に驚き一種不思議の感に打たれたと云ふ事も、亦首肯し得らるゝのである。却て神秘を云はざる處、ゆかしく感ぜられた。

●近角講師は親鸞聖人の信仰、理想、及び人生觀に就て、最も意を注いで述べられたやうであつた。此意味を持たずして嘆異鈔を讀む、恐く何の得る處もないであらう。近角講師の言葉をかりて云へば實感が起らむのである。

也。事前也。敎理や、哲學や、理論はたゞ之を説明するまでにして、毫も信仰其者に關係を及ぼすものでないとは、姉崎博士の言であつた、頗る痛快に感ぜられた。

●又曰く。佛、舍利弗に向て法を見る我を見るか如くせよ、我を見るは即ち法を見るなりと、而してこれ佛陀の敎なりと。「法とは何ぞや」とは吾等の直にさかむと欲する所であつた。

●また博士の説明之に及ばずして止みたるは、物足らぬ心地せられた。

●基督曰く。我を見るものは我父を見る、我を信するものは盡さざる泉なりと。而してこれ佛陀の敎と少しも變らじとは、姉崎博士の佛陀と基督との關係説であつた。

●希臘の神話に龍の一片の鱗を見るものは其全体を見るといふ話がある、人の一言を信するものは全体を信することが出来るとは、また姉崎博士の言であつた。信仰の上より見て趣味深く思はれた。

●石川講師は自然と人文に就て語られた。地文學の話さきくやうであつたが、さく人によりて珍しく思れたやうだ。最後に地理的宗教の頒布を云はれたが、結果より推して之を見ればさうなるかも知れぬ。眞宗は平民的宗教ゆゑ尾、濃、三若くは越後、江州等に多いと統計まで示された。併しこれは開祖の傳道又は弟子方方の布敎による事と思はる。勿論當時の事情を調べて見ねばならぬ。

●伊太利は火山國なり、故に迷信が多い。日本も火山國也、故に迷信が多い。火山國なるが故に温泉が多い。伊太利も日本も到る處温泉に富む。日本人の潔癖温泉多きによるとは同

●和田講師曰く。儒敎では人事を盡くして天命を俟つ、之を佛敎より見れば天命を知りて人事を盡くすことになる。人の言はむと欲して未だ言はざりし所を説破したものである。

●村上博士の講演はたゞ一回よりさくことが出来なかつた。講本は佛陀考要件五則と名けて博士自身の筆らしい。博士の頭腦はどこまでも學究的である。あまり解剖の刀は鋭くして、寸断となる恐れがある。

●同博士は釋迦中心の一佛論であるやうである。左に博士のかゝれたものをかゝりて見やう。

法身と報身と應身とは三にして一なりと雖も之を分けては法身佛の代表と見るべく、彌陀如來は報身佛の代表として見るべく、釋迦如來は應身佛の代表として見るべく、之に依て諸佛多なりと雖も大日彌陀釋迦の三佛を出てすまは密敎家の口傳なり然らば大日中心の一佛論及び彌陀中心の一佛論の成立すると共に釋迦中心の一佛論も亦成立せざるべからず吾人は釋迦中心一佛論の成立する所に於て始めて耶蘇敎と佛敎との相違の判然たるものあるを認むこの相違は千萬年の後に至るも決して改まるべからず

●秋野講師は佛敎と美術の關係と云ふ題であつた。推古式天平式等と色々と美術の形式を述べた後、之を要するに美術の發達は偉大なる信念に基くものであると結論された。而して最後に今年の講習會は吾輩の意を得たものである。從來の地方的講習會は達磨の言をかりて云は、全く無功徳であると喝破された。皆共に一笑。

●忽滑谷講師は平等論、鳥地講師は往生要集であつたをうだ何れもさく機會なかつた。

●前田講師はシミな講義の仕方である、一言にして評せば老練とても云ふべきである。花やかなところは無いが、健全

なる實のある話であつた。一日参聴したばかりで、纏めて紹介することが出来ぬ。

●十二日は最終でもあり、旁々茶話會があつた。近角講師の談話は面白く感ぜられた。それはこうである。嘗て黒谷の法然上人の處へ鎮西より態々上洛し法を求めに來た一人の修行者があつた。永い間修行して將に郷に歸へらむとして上人に暇乞し、箒を負ふて門を出でんとした。上人座右を顧みてさて、あたたら修行者が誓りをさらさずしてゆくとの聲、耳に達したと見えて踵をかへして曰く、私はすてに出家得度することこゝに久さしい。然るにもとゝりをさらさずとの仰せ、甚だいぶかしく思ふ。上人答へて曰く。法師には勝他、名聞養の三つのもともありあり。然るに其方永い間、余が法門をかき集めて國に歸りて人に誇らむとす、これ勝他である。よき學生だちといはれむと願ふこゝろあり、これ名聞である。これによりて我身のためを計らんとす、所詮利養に過ぎざるのである。この三つのもともとゝりを切らずしては、法師と云ひかたしといはれて、修行者滿身悔悟の念に打たれて、遂に笈(ぶひ)の中にある筆記類を焼きすて、勇み進んで歸へられたと云ふ話である。

●今回十日間の講習會に於て諸君が教理を研究せうと思ひて、一字一句ノートブックに書き記すとも、徒に教理を覺えたり、面白いことを知りたりして、エライ物知りになる爲めに澤山の材料を集めんと勉むるより。たゞ修養の點に心を注ぐことは講習會の趣意にも適し。且つ諸君の利益になることと思ふゆゑ、一言此の話をしたのである。と。近角講師のこと

の話は、講習會に取りて有終の美を全ふするに、適切なる談話であつた。ために講習會の意義が深く感ぜられた。

●閉會と云ふので、色々の餘興があつた。三分間演説はなか／＼巧みなものだ。自作、自流の琵琶は委員の一人によりて演ぜられた。時に取りて愛嬌ある仕方である。喝采の起るのも無理がない。

●此度の講習會は全く泉幹事が非常に盡力された結果である。一回から十二回まで階力を以て同様の事を繰返して來たのに、俄かに面目を一新したのは近來の成效と云はねばならぬ。然るに終から三日前に泉幹事の母堂が不幸との急電に接し、歸國せられたは、イカにも同情に堪へぬ。しかるに友人たる芝田學士が之に代りて最終まで之を全くせられし勞は大に謝せねばならぬ。

●此度の各學校内部の委員諸君は熱心に盡くされたのは、敬服に堪えぬ。何者の惡戯にや、閉會式の當日委員の室に動物見立として委員諸君の名が麗々と張り出され、そしていたら、み／＼く、虎、カンガール、ひさかへる、ふくろ、等の適切なる形容の下に見立てられてあつた。今は軍機洩すべきの場合でない。

●こゝに十日間の法筵終りて、辨天洞岬を出つれば、風は衣を吹いて軽く、遊はすてに開かれぬ。花は天女に似て氣韻高く、自ら微笑をたゝえて法雨の恵みに感謝するやうであつた。

(一記者)

尊翰拜受、册子悉皆難有頂敬仕候。陳者尊師には愈々御清康奉賀候、降て下拙不相變壯健に服務罷在候間乍揮御放念被下度。扱先般出征の御資著信仰問相求め、陣中のつれ／＼に再三拜讀仕衛語の了解し難きものなぞは一々標を仕り、何れ歸朝の上一日求道學舎に拜趨駕と御説示を乞ふことに致し、大體に於て兎に角了解任り平素小生が無我夢中妄想致し居り候事、貴教の筋に暗々相背かざる點に至りては大に悦ばしく相感下候。實験既などに至りては全く其に御座候。乍併小生の考は赤の染人考にて何か分らず儘に自信仕居候處、貴教によりて明晰に説明せられ暗夜に光明を得たる心地致候。何れ歸京の上は御高教を仰き度存居候。册子は本艦内にも配布し仍ほ汎く行き渡らんか爲め聯合艦隊幕僚に依頼し、更に各艦に配布せらるゝ様致候。想ふに各艦難有拜讀可仕候。小生も是よりゆる／＼拜讀仕るべく候。實は先般來求道學舎御擴張の御趣意に對し大段成に有之、何日かな一書拜呈せんと思ひ居り候折柄貴翰に接し、恰も温顔に接するが如く、又求めたく存居候册子を入手するに至り神變不思議に相感下候先は御禮旁右用事のみ如此に御座候。

軍艦〇〇ニテ主計長 窪田重次

求道會館設立喜捨受領報告(第五)

- 金壹圓五拾錢也(二、三、即納) 某月一 心殿
金參拾貳圓也(即納) 飛騨 桑月一 心殿
金壹圓也(即納) 加賀 米谷半兵衛殿
金拾圓也(即納) 東京 依田 豐殿
金貳圓也(即納) 山形 菊池秀言殿
金貳圓也(二回、即納) 同 殿

- 金壹圓也(即納) 青森 生玉慈照殿
金貳圓也(二回) 信州 大日方大助殿
金貳拾五圓也(即納) 女學校 惠比壽みよし殿
金貳拾圓也(即納) 女學校 近角常觀殿
金拾圓也(即納) 秋田高等女學校 赤間みね殿
金拾圓也(即納) 佐賀縣視學官 伊藤哲英殿
金拾圓也(即納) 越中 館兵右衛門殿
金拾圓也(即納) 全 土屋觀山殿
金拾圓也(即納) 全 其日慶寶殿
金拾圓也(即納) 全 大谷賢了殿
金拾圓也(即納) 全 宮嶋得雄殿
金拾圓也(即納) 全 村上上雄殿
金拾圓也(即納) 全 菴外見雄殿
金拾圓也(即納) 全 末森徹運殿
金拾圓也(即納) 全 有田法慶殿
金拾圓也(即納) 全 長谷川祐誠殿
金拾圓也(即納) 全 高村教含殿
金拾圓也(即納) 全 苗村仙次郎殿
金拾圓也(即納) 全 乘杉教存殿
金拾圓也(即納) 全 宮尾瞭秀殿
金拾圓也(即納) 全 多賀諦觀殿
金拾圓也(即納) 全 齋藤量性殿
金拾圓也(即納) 全 竹友殿
金拾圓也(即納) 全 竹部知法殿
通計 小計百九拾二圓五拾錢也
金九百三拾六圓七拾五錢也





# 無盡燈

明治三十三年七月  
第九卷  
第七號  
七月一日發行

## ▲研究▼

○月氏國の興亡

白鳥庫吉

○支那天台に於ける山家山外の異論

池田秀賢

○陀児に就て

佐々木月樵

○婆娑論の教義概観

舟橋水哉

## ▲雜纂▼

○日本に於ける浄土教の先覺者

山田文昭

## ▲修養▼

○生の問題

長島徹映

○慈雲尊者に就て

諸同人

## ▲時論▼

○近時の宗教的對象論「嵐川」○教家の健忘性「衣川」○吾見たる戦争の影響「稚川」○オ・友よ「台坊」○新進教家の猛省を望む「玄骨」○宗教の復活「筑川」○六月誌壇—新刊紹介—報道

●一部金拾銭一年分金壹圓(郵税總て不要)

發行所 東京巢鴨 無盡燈社

## 哲學館大學廣告

九月上旬大學本科及豫科補缺募集

●郵券二錢寄送あらば規則書に貧

生學資支辨法を添て贈呈すべし

東京市小石川區 哲學館大學

## 歎異鈔 全

右今回本學舎より出版仕候。紙數四十三頁、施本として最も適し候。定價は左の如く候。

○一冊三錢、百部以上一冊に付二錢五厘、郵税三冊まで貳錢の事。

發行所 東京市本郷區 求道學舎

▲渡米せよ本會は此

▲聲實行の爲に起る

▲渡米は目下の急務

▲也活動の好時機也

- 會員の會費は機關雜誌社會主義五冊金四拾錢以上の代價を前納すべし
- 會員には社會主義誌上を以て質問に應じ相談に答へ忠告等を與ふべし
- 在外會員と成りて渡米する會員には會長の紹介状及び信認狀を附與す
- 機關雜誌一冊八錢五冊四拾錢十冊七拾五錢要前金見本五厘切手十七枚
- 會長片山潜は當時米國各地巡回視察に従事せり各地の狀況逐次來信す
- 在米日本人六萬人に達し在留本會員は二千人に及ぶ各種事業に聯絡す

▲渡米は日本の膨脹

▲也國民の大發展也

▲渡米せよ渡米せよ本會は此

▲聲と實行せんがために起る

# 渡米協會

事務所 東京市神田區三崎町三丁目一番

家庭社編輯

## 家庭はなしの園

表裝頗美裝全一冊定價金二十錢郵税金四錢

現時 佛教主義を基礎としたる家庭修養に恰當したる好讀者に接せざるは現代社會の渴望せらるゝ所本書は青年文士が健全なる信念によりて尤も解し易く讀易からしめ讀者をして知らずの内に精神の

修養を得せしめ家庭の和樂を増進せしめんとするは本書の特色にして收むる所也御伽噺あり美譚あり譬諭談あり小説あり極めて平易に極めて面白く一度に讀めば至通至俗なる文字によりて

家庭修養の大寶庫となり座談の資となすべく一讀悦として春風の園に彷彿するが如し

發行所 東京市飯倉町五丁目 森江本店

發賣所 東京市本郷區 森江分店



文學士 近角常觀氏著

# 信仰問題

再版

人、苦悶を経て、初めて人生の眞意義を悟り世界慘憺たる舞臺を過ぎて、終に靈の光明を發し、**鐘聲**は已に曉天に響き、國民發揮す、今や「信仰問題」の**震雷劇雨**は絶大の自覺を生じて、火血の間に一大修養の功を積まむとす、**震雷劇雨**夕陽西山の後、

本書 九葉  
挿入 眞葉

- ▲米國シカゴ青年會館
- ▲英國議院及ウエストミンスター卿監
- ▲ワルトブルヒ城中ルイテル聖書翻譯室
- ▲巴里に於ける萬國宗教大會
- ▲獨逸宗教沿革の遺跡の圖五個

清淨界を出現せむ、國民**信仰の地盤**に立

鍛鍊陶冶世界に於て**最大理想**を現實するの

から**此の靈的**需要に應ず**實に本書**なりむ

▲菊版二百六十頁 製本高尚

▲上製價六十五錢並製價五十錢郵稅八錢

發兌元 東京本郷四丁目 文明堂

賣捌所 東京本郷森川町一番地 求道發行所

## 規定

- 一、本誌は毎月一回(二日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の住所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部 一ヶ月 六ヶ月 一年 郵稅一冊

金拾錢 金拾錢 金六拾錢 金壹圓拾錢 に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年六月廿一日印刷  
明治三十七年七月 日發行

發行兼編輯人 百目木智璉  
印刷人 白土幸力  
發行所 東京市本郷區森川町一番地  
求道發行所 (電話下谷二四三二)

大賣捌所 東京市神田區神保町 文明堂  
同 本郷四丁目 文明堂



佛法談合のとき、物を申さぬは信のなきゆゑなり。わが心にたくみ案じて申すべきやりに思へり。よそなる物をたつねいたすやうなり。心にうれしきことは、その儘なるものなり。寒なれば寒、熱なれば熱と、その儘心の通りをいふなり。佛法の座敷にて物を申さぬことは不信のゆゑなり。又油斷といふことも信のうへのごとくなるべし。細々同行により合。讚嘆申さは油斷はあるまじきの由に候。

〔蓮如上人御一代問書〕

